W9.2300/24

洛合直文編

# 新撰歌典

東京　博文館藏版

# 新撰歌典

## 緒言

一この書は、はじめて歌を修めむとするものゝために、著したるものなり。さては類語作例の如き、をへて解し易きもののみを撰ひたり。かの巻首の沿革の如き、作法の如き、書式の如き、巻尾の枕詞の如きも、充分にかゝまほしかりしゃと、中々にわつらはしくやありなむとて、大かたになしおきたり。猶くはしくは、更にものするところあらむ。

一この書の体裁、従來の歌書といいさくことなれり。従來の歌書は、いつれも、四季、戀、雜とわけたり。されと、大陽暦行はるゝ今日にありては、春夏秋冬とわくるゝいかゝあらむ。

又戀といふも、從來の如きあやしげなるはいかゝあらむ。又雜といふも、從來の如き種々まゝり居るはいかゝあらむ。四季ハ節序として、春夏秋冬に關せず、今の十二か月にわゝつ方をかるへし。戀ハ區域をせばむる方をかるへし。雜はすくなくも、神祇、人倫、史傳、祝賀、別離、羈旅、軍陣、述懷、懷舊、哀傷、天象、地理、人物、動植、飲食、器財などにわかつ方をかるへし。こはわれ〳〵の持論なれ、こたひは、それにより てかきたり。世は歌人の評ハいかゝあらむ。そはをらも。

一春夏秋冬を、今の十二か月にわかちハわかちたれと、それ類語といひ、その作例といひ、ふるくより春夏秋冬にもとつきてよめるなれは、直にこをひき直さむハ、かたはゞ中のかたき事なめり。例へハ、一月に從來は冬の部をもちこみ、雪、霰、氷、水鳥、網代などの題を載せむゝ、そのすさまじさいかばかりならむ。さりとて、今の一月には若菜も出てす、梅もさかす、鶯もなかされハ、そをよまむもいかゝあらむ。これによらむか、かれまよらむか、こゝにいたりて、實にくるしまさるを得さるあり。この書は、その改良の手はしめとして、まつ春夏秋冬を、十二か月にあらため、從來の題をその中にをさめさり。即ち一二三四の四か月に、春の題ををさめ、五六七の三か月に、夏の題ををさめ、八九十の三か月に、秋の題ををさめ、十一十二は二か月に、冬の題ををさめたり。こはやゝ姑息のやうなれと、習慣上やむを得さる

ものあれはあり。とにもかくにも、陽暦の今日、陰暦まなつむへきものまあらず、おひ〳〵も、從來の習慣をやふり、更に大にあらたむるところあらむ。

一いにしへより歌題になり居れと、今日にありて不用なるものあり。又いにしへにおくも、今日まありて必用なるものあり。例へゝ呼子鳥の如き、種々の説ありて、さたかならされと、むやくより春のものとしてよめれは、それまゝ加へれけり。又郵便、電信の如き、いにしへにはなかりしかと、今日にありてゝ、いたく必用なれは、さる題も設けたり。一は舊題をのこさむの意。一は新題をまさむの意。

一子れ日れ如き、七夕の如きゝ、省きたる方あらるべからむ。十五夜の月といふ名稱の如きは、やめたる方あかるべからむ。その他、この類いとおほかり。この書は、あるべくさることとさけたり。

一類語はおよふかきり、古歌よりとりたれと、また新に作り出せるもあり。例へゝ滊車のところに、まかね路、けふり車、火車などの詞をのせたるの如し。新題の續々あらはるゝ今日、またやむを得さることもあらむ。

一作例もおよふかきり、古人のをあけたり。されと、新題などいたりては、その作例なきをいかにかせむ。さてゝそは今人のをあけたり。その意前まれあし。

一歌よみまは數派あり。眞淵派といひ、景樹派といひ、なにの派

といひ、くれの派といひ、各好むところを以て、相爭ふらことし。そは甚たいはれおき事といふべし。眞淵翁の歌といへとも、よきもあらむ。あしきもあらむ。また景樹翁の歌といへとも、たくみおるもあらむ。つたおきもあらむ。よきいよく、あしきいあしく、巧みなるいたくみに、つたおきは拙きなり。眞淵翁の歌とて、あしきもれを、よしといはむにい。たれらその愚を笑はさるものあらむ。景樹翁の歌とて、たくみなるものをつたおしといはむふは、たれかまたその迂をあざけらさるものあらむ。この書の作例い、歌れよきものいこれをとり、人を區別せす。

一近ころ新体詩といふもの起れり。その人々の議論をきくは、短歌ようてい、複雜きはまりなき想思を滿たすこと能はすといへり。おかり。まことに然り。されと、論者い、短歌の外に長歌といふもれゝあることを知らぬにやあらむ。われわれい、特に長歌を振ひ起して、かの無味おる、かの蕪雜なる新体詩を退けむとを。これこの書に、長歌を載せたるもおよしおり。

一短歌と長歌とい、共に五七の調なり。われ〳〵は近世人の口調として、七五の調の必要なることを認むるおり。これこの書に、今様を載せたるゆゑよしなり。

一短歌にていい、その句調さたまりて、變化をくおきこゝちせらるゝなり。こゝに古へより旋頭歌といふものあり。今の

世には隨分れもしろきものならむ。これこの書に、旋頭歌を載せたるゆゑよしあり。

一歌には、種々の名稱ありて、古くより巧みをつくしたるものすくなからす。物名、折句、沓冠、廻文など、そのおもおるものならむ。こゝ、いつれも眞正の歌といひかたきものなれと、一わたりは、その体を知りれくもあしからさらむ。これこの書に、その体の歌とも載せたるゆゑよしなり。

一見出は、節序ゝ節序、神祇ゝ神祇、祝賀ゝ祝賀とすへきなれと、節序にかきり、きはめてれほゝれは、それのみゝ、一月二月と、月を以て見出としたり。こは別に意ありしにあらす、たゝ讀者の便をはかりて。

一長歌以下も、短歌とれおしく部門はわゝちたれと、さてその部門を以て、見出をつくるほとにもあらされは、そゝ長歌を以て見出とおたり。こも讀者の便をはゝりて。

一今樣、旋頭歌、物名、折句、沓冠、廻文の如きは、部門をわかつはとにもあらされは、大ゝたの順を立てゝ載せたり。見出は長歌にれおゝ。

一長歌以下は作例のみにて、類語ははふきたり。そゝ短歌のところにて、充分おるべけれゝなり。

一この書は當夏期の休業中、修善寺の温泉、鴨川のほとり、嵐山の麓、須磨、明石、舞子か濵、布引の瀧、住吉おと、ところ〳〵に暑を避け、その暇にかきたるものなり。旅中のしわざに

しあれゝ、疎漏のところ、誤謬のところも定めてはかからむ。それ再版をまちて、大にあらたむるところあるべし。

この書の著者は、小中村義象、萩野由之、増田于信の三兄と、れのれとなり。四人の名をしるすべきなれど、あまりわつらはしけれは、今はおのれ一人の名をかゝげたるにかゝ。

明治廿四年の十月二十八日

落合直文識

# 新撰歌典目次


歌の沿革
歌の作法
類語及ひ作例
節序……一頁
神祇……三〇七
人倫……三一〇
史傳……三二一
戀愛……三三六
祝賀……三五一
別離……三六一
羇旅……三六三

軍陣……三六六
述懷……三六八
懷舊……三七一
哀傷……三七四
天象……三七七
地理……三八六
人物……四〇八
動植……四一七
飲食……四二八
器財……四二九
長歌……四四四
今樣……五一六
旋頭歌……五二五





物名……五二九
折句……五三三
沓冠……五三四
廻文……五三五

## 枕詞

新撰歌典目次　終

# 新撰歌典

落合直文編

## 歌の沿革

花鳥風月、森羅万象、すべて生の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌をよまざりける、とは古今集の序にいへるごとく、凡天地の間に生息する人は、時の古今を問はず、海の東西を論せず、文明の少きより、下野蠻の民に至るまで、いつれも歌を謠はざるはなし、これ我國の歌、その史乘に載せたるもの、神代の昔より既に見ゆ、その詞い、思ふまゝを直に述べたるものなれば、或い長く或い短く、同一ならずといへども、大かたい五七の調に定れり、その先祖は素盞嗚尊、出雲國にて詠みたまへる、

八雲立つ、出雲八重垣、妻こめに、八重垣つくる、その八重垣を、

といへる歌なり、これより諸神諸帝の歌、載せて古事記日本紀にあり、その歌、男女

間の情を述べたるか多けれども、又さる一局部にのみ止まらず、或い軍陣の間に、士氣を鼓舞し、賊を誅する時などに用ゐたるもあり、神武天皇の大和にて、賊徒どもを征討し給ひし時、

みつ〳〵し、久米の子等が、粟生には、韮一本、そねがもと、そねめ繋きて、討ちてしやまむ、

みつ〳〵し、久米の子等が、垣下に、植ゑし殖美、口ひゞく、吾は忘れじ、討ちてしやまむ、

といふ歌を謠ひ給ひて、軍氣を鼓舞し、また、

楯並めて、いなさの山の、木の間ゆも、いゆき守らひ、戰へは、吾はや飢ぬ、島つ鳥、鵜飼かとも、今すけに來ね、

といふ歌をよみ給ひて、鵜飼の部族どもに、應援を求めたまひしか如き是なり、かく上代は、男女の間のみならず、人情の感動には、すへて歌を用ゐたるものなれは、そのよみ出づるところ、天眞爛熳にして、敢て巧を求め奇を競ふことなく、所謂歌を謠ふものにて、歌を作るものにいあらざりしなり、今こゝに仁德允恭の頃の、二三を出さむ、

仁德天皇

贈

うま人の、たてる言立、うさゆつる、絶え間つかむに、並へてもかも、

答　磐姫皇后

ころもこそ、二重もよき、小夜床を、あらへん君は、かしこきろかも、

贈　衣通姫

我兄子が、來べきよひなり、さゝかにの、蜘蛛の行ひ、今宵しるしも、

答　允恭天皇

さゝらがた、錦の紐を、ときさけて、あまたは寐すと、たゝ一夜のみ、

武烈天皇

石の上、布留を過ぎて、薦枕高橋すぎ、物多に大宅すぎ、妻隱る小佐保をすぎ、玉笥には飯さへ盛り、玉盌に水さへ盛り、泣きそぼち行くも、影媛あはれ、

此等の歌は、當時頗る名歌とよはれしものにて、奈良朝以後には、一の歌曲として、雅樂寮にて奏するにいたれり、天智天武の文化を經てよりい、大に從來質朴の風を變し、歌亦隨て進化し、元明元正の世には、殆と其盛を極めたり、蓋し天智帝以前の歌は、直に思を

述ふるのみあれは、其風もいと質朴なりしか、奈良の朝に至りては、文學普及し、その思想を挾みて詠み出てし故に、文辞雄渾にして、頗る前代にまさる觀あり、當時歌人多き中にも、柿本人麿、山邊赤人の二人は、尤その妙を得て、世に歌聖といはれたり、紀貫之曾て二人の優劣を論して、人麿は赤人が上に立たんこと難く、赤人は人麿が下に立たむこと難しといへり、今二人の歌を並へ擧けて、その風を示さむ、

輕皇子安騎野に宿り給ふ時よめる歌　柿本人麿

やすみしゝ　吾大君、たかひかる、日の御子、神なから、神さびせすと、ふとしかす、都を置きて、こもりくの、初瀬の山い、まきの立つ、あらき山路を、岩かねの、しもとおしなへ、さかとりの、朝越えまして、かきろひの、夕さりくれば、み雪降る、あきの大野に、はたゝ、き、玄のを押しなへ、草枕、旅やとりせす、古おもひて、

反歌

あきの野に、宿る旅人、うちなびき、いもぬらめやも、いにしへ思ふに、
まくさかる　あら野にいあれと、紅葉の、過ぎにし君の、形見とぞ來し、
ひむがしの、野にかきろひの、たつ見えて、かへり見すれい、月傾きぬ、

ひおめしの、みこの命の、馬並めて、みかりたゝしし、時いきむかふ、

紀伊の國に行幸ありし時よめる　山邊赤人

やすみしゝ、吾大君の、とつみやと、仕へまつる、さひかのゆ、そかひに見ゆる、おきつ島、清きなぎさに、風吹けば、白波さわぎ、潮ひれば、玉藻かりつゝ、神代より、玄かぞたふとき、玉津島山、

反歌

若の浦に、玄ほみちくれば、潟を無み、芦邊をさして、田鶴なきわたる、

この二人につぎて、名匠といはれしものは、山上憶良、大伴家持なり、この二人は、前の山柿には、やゝ及ばざる所あれども、その縦横悲壯なることい、遙に他の作者に超えたり、

貧窮問答歌　山上憶良

風まじり、雨降る夜の、雨まじり、雪降る夜は、すべもなく、寒くしあれば、堅塩を、とりつゝしろひ、糟湯酒、うちすゝろひて、玄かふかひ、鼻ひしゝに、玄かとあらぬ、髯かきなでゝ、我を置きて、人はあらじと、誇ろへど、寒くしあれば、麻衾、ひきかゝふり、布肩衣、ありのことゝ、着添へども、寒き夜すらを、我よりも、貧しき人の、父母は、飢ゑ寒からめ、妻子どもは、こひて泣くらむ、この時は、いかに玄つゝか、な

がよはわたる、天地は、廣しといへど、わがためは、狹くやなりぬる、日月は、明しといへど、わがためは、照りやたまはぬ、人皆か、吾のみやさかる、わくらはよ、人とはあるを、人並に、我も作るを、綿もなき、布肩衣の、海松のごと、わゝけさかれる、かかふのみ、肩に打懸け、ふせいほの、まきいほの内に、直土に、藁解き敷きて、父母は、枕の方に、妻子どもは、足の方に、圍み居て、うれへさまよひ、竈には、烟ふきたてず、甑には、蜘蛛の巣かきて、飯炊く、ことも忘れて、鵠鳥の、のとよびをるに、いとのきて、短きものを、はしきると、いへるがごとく、楚とる、五十戸ちが聲は、ねやどまで、きたてよばひぬ、かくばかり、すべなきものか、世の中の道、

世の中を、うしとやさしと、思へども、飛び立ちかねつ、鳥にしあらねば、

## 喩族歌

久方の、天の戸開き、高千穂の、嶽にあもりし、すめろきの、神の御代より、檍弓を、手握りもたし、眞麻矢を、手挾み添へて、大久米の、ますらたけをゝ、前に立て、靫取り負はせ、山河を、いはねさくみて、蹈みとほり、國求しつゝ、千早ぶる、神をことむけ、まつらへぬ、人をもよはし、はきよめ、仕へまつりて、蜻蛉洲、大倭の國の、橿原の、畝火の宮に、宮柱、ふとしり立てゝ、天の下、をらしめしける、天皇の、天の日嗣

## 大伴家持

と、つきてくる、君の御代〳〵、かくさはぬ、赤き心を、すめらへに、さはめつくして、仕へくる、祖の職と、ことたてゝ、授け給へる、生の子の、いやつぎ〳〵に、見る人の、語りつきてゝ、聞く人の、鏡にせむを、あたらしき、清きその名ぞ、おほろかに、こゝろおもひて、むなことも、祖の名たつな、大伴の、氏と名におへる、ますらをのとも、

玄き島の、大和の國に、あきらけく、名におふとものを、をこゝろつとめよ、

劍太刀、いよゝ磨くべし、いにしへゆ、さやけくおひて、來にしその名ぞ、

右に擧げたる四首の歌は、何れも實地に詠みたるものよて、殊に憶良、家持の歌は、當時の實況を見るに足れり、即ち貧窮問答の歌は、當時天下飢饉にて、四民困窮してけるが故に、憶良この歌を上りて、下民の實況を諷奏せしものなり、又喩族歌は、出雲守大伴古慈悲、淡海三船の讒言によりて、解任せられしより、家持この歌を作りて、一族を喚起したるなり、これらにても當時の歌い、實際に應用せられしを知るに足らむ、

然れども此頃よりして、詠物の風、やゝ行はれ、相聞とて、物に寄せて、思を述ふる歌ども、いて來ぬ、これい後世、題詠の濫觴にして、この風い、當時行はれつる、詩賦の方より、移り來りしものなるべし、

當時始めて、歌集の編纂あり、即ち万葉集これあり、この書の編纂の時代、幷に編者の姓名い、古來諸説ありて、一定せずといへとも、聖武天皇の時、橘諸兄撰ひつるを、後に、大伴家持等が、書き加へたりといふ説、當れるに近し、

平安遷都の後い、詩賦盛になり、特に嵯峨天皇に至りてい、いたく詩賦を好み給ひけれい、朝臣皆これに靡きて、歌いたく衰へぬ、かく衰へたるにつけてい、歌をよむもの、唯三十一字を事として、長歌をよむものなく、万葉の古風い、全く地を拂ふに至れり、そい仁明天皇四十の御賀に、興福寺の僧徒が奉りける長歌あるを見るに、

日本の、野馬臺の國を、かみろぎの、少名彦が、葦菅を、植ゑ生しつゝ、國固め、造りけむより、沖つ波、たつ年ことに、春いあれと、今年の春い、物ごとに、滋り榮えて、天地の、神も悅び、海山も、千代よびかはし、梅柳、常よりことに、玄き榮え、咲まひ開きて、鶯も、聲改めて、八千種に、くすしきことは、茜さし、天照す國の、日の宮の、聖の御子ぞ、瓠葛の、天の橋立、踐み歩み、天降りいましゝ、大八洲、天つ日嗣の、高御座、萬世鎭ふ、五八の、春にありけり、我國の、聖の君は、尊くも、大ましますか、日の宮の、聖の御子の、天下に、大ましまして、御世々々ゑ、相承け嗣きて、君ことに、現人神と、なり給ひ、大ましませば、四方の國、隣の君は、百嗣に、繼くといふとも、いかか、等しくあらむ、そこ故に、神も順ひ、佛さへ、敬み給ふ、ます〳〵に、今我帝は、往へも、大ましまさじ、將來も、何に申さむ、釋迦の法、弘め給ひて、出家の人、法の族を、罪あれと、ゆるし給ひつ、咎あれど、宥め給ひつ、譬ゑき、大御惠の、いと廣く、大ましませば、出家の人、法の族は、御世々々を、恒に惜むと、年月を、堰かへ留めて、過さずて、鎭はむとこそ、誓み願ひ、禱り申せ、然れども、世のことわりと、歡びの、春に、ありけり、如何して、帝の大御世、万代に、重ね飾りて、榮えしめ、奉らんと、柘の枝の、よし求むれば、佛こそ、願ひ成らしたべ、聖のみ、驗はいませ、そこ故に、帝を鎭ふに、驗ます、陀羅尼の御法、冊卷を寫し繕へ、護りあす、聖の御像、冊軀造りまつりて、四十の師の、悟り開けて、行ふ、人を調へ、誠を致し、四万に、八千卷添へて、誓願ひ、讀みたてまつり、飾り祈り、鎭ひ申せり、行へる、これの所爲態を、いのにして、陳へ聞えむと、茜さす、終日すからに、烏羽玉の、小夜すからまで、時日經て、思へる時に、落滿の、堰かつもかねて、世中の、いすかしわざを、添へ飾り、申しそまつる、そがなかに、大海の、白浪開けて、常世嶋、國成し建て、到り住み、聞き見る人は、万世の、壽を延へつ、故事に、いひ語り來る、澄の江の、淵ゑ釣せし、皇の民、浦ノ嶋子が

天女、誂ひ來て、紫の、雲たなびきて、片時に、ねて飛ひ往きて、これぞこの、常世の國と、語らひて、七日經しから、限なく、命ありしは、この島に、こそありけらし、三吉野に、ありしくましね、天女の、來り通ひて、その後は、謎蒙りて、領巾衣、着て飛びにきといふ、これもまた、この島根の、人にこそ、あるきといふなれ、五種の、寶の雲は、大悲者の、千種の御手の、人の世を、万代延ぶる、一種を、別に飾りて、万代に、君を鎮へり、磯の上の、緑の松は、百種の、葛に別に、夜の花、開き榮えて、万世に、君を鎮へり、鶯は、枝に遊ひて、飛ひ舞ひて、囀り歌ひ、万世に、君を鎮へり、澤鶴は、命を長み、濱に出て、歡ひ舞ひて、滿潮の、斷ゆる時なく、万代に、君を鎮へり、薫修法の、力を廣み、大悲者の、まもりを厚み、万代に、大御世なさは、八十里城、城に芥子拾ふ、天人は、手を擧けて、拾はずなりぬ、八百里城、磐が根を、領巾衣、裾乘れ飛し、拂ふ人、拂はずありて、大君の、護りの法の、藥を擎け、持ち來候ふ、かくのこと、鎮へることは、事毎に、劣るといへとも、物ことに、數にもあらねと、旅人に、宿春日なる、山階の、佛聖の、奉献り給ふなり、大御世を、万代に祈り、佛にも、申しまつれる、ことのさは、この國の、本つ詞に、逐ひ倚りて、唐國の、詞を假らず、書き記す、博士雇はず、この國の、言ひ傳ふらむ、日の本の、倭の國い、言玉の、幸ふ國とぞ、古語に、流れ來れる、神語に、傳へ來れる、傳へ來る、ことのさに〳〵、本つ世の、事尋ぬれば、歌語に、詠み反して、神事に、用ゐ來れり、君事に、用ゐ來れり、本つ世に、依り遊ひて、佛まも、神にも申し、あげ陳べて、禱し祓い、丁寧と、聞しめしてむ、嬰兒の、諺語に、折箸の、本末知らに、乱れ絲の、乱れてあれど、九重の、御垣の下に、常世雁、率ゐつらねて、小牡鹿の、膝折り反し、候ひ、きこえそまうす、いかに聞えむ、汗流し、かしこみおそる、いかに聞えむ、

この歌を、當時の國史に載せて、夫和歌之体、比興爲レ先、感二動人情一、最在レ茲矣、季世陵遲、斯道已墜、今至二僧中一、頗存二古語一、可レ謂三禮失、則求二之於野一、故採而載レ之、とあり、かかる拙き歌をも、いと珍しげに、國史に採られたるを見れば、當時歌道の衰頽せること、推して知るべきなり、

貞觀の頃に至りて、歌再ひ行はれ、世に六歌仙と稱へたる人々も、大方この時代に出てたり、これらい、いつれも三十一字に限りて、長歌い一首もなし、紀貫之この人々を評して、僧正遍照い、歌のさまい得たれとも、まこと少し、たとへば繪にかける女を見て、いたつらに心を動すが如し、在原業平い、その心あまりて、詞足らず、萎める花の色なくて、香

殘れるが如し、文屋康秀ハ、詞たくみにして、そのさま身におはぬ、いはゞ、商人のよき衣着たらんか如し、宇治山の僧喜撰ハ、詞かすかにして、始終たしかならず、いはゞ秋の月を見るに、曉の雲に逢へるが如し、小野小町ハ、古の衣通姫の流なり、あはれなるやうにて、強からず、いはゞ、よき女のなやめるところあるに似たり、大友黒主ハ、詞おもしろくして、そのさま卑し、いはゞ、薪負へる山人の、花の蔭にやすめるが如し、といへり、

此等の体を代表したる歌ハ、左の如し、

あさみどり、いとよりかけて、をち露を、玉にもぬける、春の柳か、　遍照

月やあらぬ、とるや昔の、春ならぬ、我身一つは、もとの身にして、　業平

草深き、霞の谷に、影かくし、照る日のくれし、今日にやはあらぬ、　康秀

わが庵は、みやこの巽、しかぞすむ、世をうち山と、人はいふなり、　喜撰

色みえて、うつろふものは、世の中の、人の心の、花にぞありける、　小町

思ひ出でゝ、戀しき時は、初雁の、なきてわたると、人ハ知らずや、　黒主

延喜に至りてハ、紀貫之、凡河内躬恒等、大にこの道を再興し、その体を一定したり、當時貫之躬恒等、勅を奉じて古今集を撰ひ、四季、賀、戀、離別、哀傷、長歌、旋頭、俳諧等の數部に分ちぬ、凡二十卷なり、この体裁は、後世の勅撰、并に私撰歌集の準則を立てたるものにて、歌格も亦、遂にこれを奉ずることゝなりぬ、されとも長歌ハ、衰頽の餘を承けて、句調變じて七五となり、氣もなく實もなく、萎靡薄弱の体となれるはくちをし、その一二をあくれハ、

ふる歌奉りし時のもくろくのその長歌　貫之

千早ふる、神の御代より、吳竹の、世々にもたえず、あまびこの、音羽の山の、春霞、思ひみたれて、五月雨の、空もとゝろに、小夜ふけて、山時鳥、あくごとに、誰もねざめて、唐錦、立田の山の、紅葉を、見てのみ志のふ、神無月、しぐれ〳〵て、冬の夜の、

庭もはたれに、ふる雪の、あはゝ消えかへり、年毎に、時につけつゝ、あはれてふ、ことをいひつゝ、君をのみ、千代にといはふ、世の人の、思ひするがの、富士のねの、もゆる思ひも、飽かすして、別るゝ涙、藤衣、おれる心も、八千種の、ことのはことに、すへらきの、仰せかしこみ、まさ〳〵の、中につくすと、伊勢の海の、浦のしほがひ、拾ひ集め、とれりとすれと、玉の緒の、短き心、思ひあへす、あはあらたまの、年を經て、大宮にのみ、久方の、晝夜わかず、つかふとて、かへりみもせぬ、我宿の、去のふ草生ふる、板間あらみ、ふる春雨の、もりやえぬらむ、

冬の長歌　躬恒

千早ふる、神無月とや、けさよりゝ、曇りもあへす、打去くれ、紅葉とゝもに、ふる里の、吉野の山の、山あらしも、寒く日毎に、なりゆけゝ、玉の緒とけて、こきちらし、霰みたれて、霜氷、いやかたまれる、庭の面に、むら〳〵見ゆる、冬草の、上に降りしく、白雪の、つもり〳〵て、新玉の、年をあまたも、過しつるかな、

當時の歌仙ともいはるゝ、貫之躬恒等の詠みたるにても、かくつたなく、かゝるものすら、尚千首中、僅に五首を載せたるにても、當時長歌ゝ、歌人が一の儀式としてよむ外、更に世に行はれざりしを知るべし、さてこの撰集に預りたるものゝ、二人の外に、紀友則、壬生忠岑ありて、共に名匠たり、ゐの他、藤原敏行、坂上是則、及ひ僧素性、伊勢ノ御等ゝ、尤も妙手ありき、天暦に至り、後撰集の勅撰あり、坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔五人（世に梨壺の五人といふ）撰進す、藤原伊尹、和歌所別當となりて、これを總裁せり、一條帝の時、拾遺集の勅撰あり、以上古今後撰拾遺の三集を併せて、三代集といいふあり、これより代々勅撰ありて、土御門帝の新古今集までを、八代集といひ、後花園帝の新續古今集までを、總稱して二十一代集といへり、後撰以下二十集ゝ、皆古今集に倣ひて編纂し、体裁いつれもその範圍を出つるものあし、

かくの如く二十一代集ゝ、その体裁こそ、その軌轍を一にしたれ、ゐの歌風ゝ、おのつからその姿を異にしたり、是時勢の然らしむる所なれと、終に古今集の上に出づるものなきゝ、歌道次第に衰へ行きし証あり、さて第二後撰集の歌風は、調と姿とを擇はず、心志を先とし、第三拾遺集は、人情に近くして、高尚ならざるを採りしかば、餘韵薄し、當時の作者は、桐壺五人の外、平兼盛、壬生忠見、曾根好忠等、尤も名あり、第四後拾遺集（白河天皇の朝）は、やゝ智巧に近くありて、古風を失へり、即ち自然の境を離れて、人工の域に赴きしものなり、

此集の作者は、源經信、重之、藤原公任、範長、大中臣輔親、法師には、能因、良暹、婦人には、紫式部、赤染衛門、和泉式部、大貳三位等あり、第五金葉（崇德天皇の朝）第六詞花（近衛天皇の朝）の二集に至りては、つとめて興あらんことを求めて、やゝ俳諧に類せるものあり、當時の作者は、源俊頼、藤原基俊等を魁首として、大江匡房、藤原顯季、長實、公季、源顯仲、僧隆源、女流には、肥後、河内等あり、第七千載集（安德天皇の朝）は、前二集の姿を捨てゝ、專ら優美なるものを撰びたれば、三代集の中を得て、高致幽艶の漸を開きたり、この集の撰者は藤原俊成なり、第八新古今集（土御門天皇の朝）は、高尚優美にして、情韵共に深く、且新奇自在なるものを取りしかば、前後の集中に卓絶して、直に古今集に追蹤し、後世新古今風とて、これを奉じたり、當時名匠輩出して、天子には、後鳥羽、順德、土御門の三帝あり、大臣には、藤原良經あり、縉紳には、藤原俊成、其子定家、藤原家隆、雅經、有家、源具親、細衣には、西行、寂蓮、女流には、俊成の女、武將には、源實朝等あり、第九新勅撰集（後堀河天皇の朝）を經て、第十續後撰集（後嵯峨天皇の朝）に至りては、承久の乱を經て、朝紳零落し、定家の一流、獨その餘を傳へしのみなれば、歌道狹隘となりて、新古今の風体、つひに地を拂ふに至れり、

是より先、禁中に歌合のこと始まり、隨ひて題詠のこと盛に起りぬ、さて歌合は、歌の優劣を爭ふ勝負事にて、判者の判決し得ぬものゝ、天子の親裁をも請ふやうのものなれば、いたく歌人の熱心を來し、その結果、寢食を忘れ、身命を拋つもの出て來て、歌亦隨ひて巧緻に赴き、一字一句といへども、苟もせざる有樣といなれりけり、天德禁中の歌合に、壬生忠見、平兼盛に番ひぬ、忠見の歌、

戀すてふ、吾名いまたき、立ちにけり、人知れずこそ、思ひそめしか、

兼盛の歌、

忍ぶれど、色にいでにけり、わが戀ひ、物やおもふと、人の問ふまで、

とあり、時に左大臣藤原實頼判者たり　優劣を決する能はず、披講するに及ひ、天皇屢兼盛の歌を吟し玉ひしにより、終に兼盛の歌を以て、優とせしかゝ、忠見いたく望を失ひて、遂に憂ひて死にけり、又藤原公任、客を會して、惜春の歌を作りぬ、時に三月二十九日なり、藤原長能の歌に、

心憂き、年にもある哉、二十日（はつか）あまり、九日といふに、春の暮れぬる、

公任難して、春豈三十日にして盡さんやといひしに、長能ふかく慙とし、家に還りて病を發し、遂に死にけり、また源頼實れ、住吉の神に祈りて、某をして世を驚すほどの歌あらしめ玉ひあれ、命を縮むといへども、亦甘心すへしと申して、やかて歌を得たり、

木の葉散る、宿れきゝわく、ことぞなき、時雨する夜も、時雨せぬ夜も、

とて、間もなく病を得て死にけり、此等れ纔に三十一字を以て、其身を失ひしなり、其情まことに悲笑すへしといへども、當時歌に熱心なる樣、想ひやるべし、かく歌に熱心なる代とありけれい、隨ひて修業傳習の風起りにけり、それ藤原長能、當時に名高かりけれい、時橘永愷、（疎髮して能因さいふ）長能に就いて、歌を作る要を問ひしに、長能、

山ふかみ、落ちてつもれる、もみち葉の、乾ける上に、時雨ふるあり、

といふ歌を學けて、体裁よろしく、かくの如くなるへしと教へたるに、永愷深く領悟し、遂に長能に師事したり、歌の師資これより始まれり、と當時の書に云るせり、是より和歌傳授の法行はれ、歌人各門を張り黨を立て、互に相詆毀する弊風をいたせり、藤原基俊れ、源俊頼と、各一家を立て相下らす、その門徒に至りてれ、互に相短毀して、相爭へり、基俊れ簡傲にして、一世を蔑視し、喜て疵瑕を指摘して、人望を失ひ、俊頼れ温厚丁寧にして、大に時譽を招き、當世の宗師と仰がれぬ、基俊の門に、藤原俊成あり、古今集の秘旨を授かり、大に名譽を顯したり、其子定家、養子寂蓮、共に歌を善くし、殊に定家は、才學ありて、能く箕裘を嗣き、縱横馳騁、つふさに精微を盡し、奥義秘説、究めざる所なし、俊成の門に、藤原家隆あり、定家と相推許す、時人稱して當世の人麿となす、かく師事の風起きてよりれ、亦隨ひて題詠のこと盛になり、かの能因の白川關、加賀の伏柴の歌の如き、いつれも題詠を事實に執り成して、世の喝采を博したるものにて、當時の風尚想ひ遣るべきなり、

承久以後、三帝播遷し玉ひてよりれ、百首歌合等の事も廢れ、定家家隆等の歌も、おのづから寂寞の口氣をあらはし、二人亡せて後れ、定家の子爲家、家學を繼きて、獨この道の泰斗となり、一世の間、二度勅撰集を撰ひ、歌の業をとりて、全く吾家の職としたり、さてその歌れ、概ね法則に汲々として、專ら緣語を用ゐしかば、歌体薄弱にして、氣韵なし、爲家の三子、爲氏、爲教、爲相、皆家業をつきて、其流を別ちぬ、爲氏の流を、御子左、

また二條といひ、爲敎の流を、毘沙門堂といひ、爲相の流を冷泉といふ、毘沙門堂の流い、他の二流に比すれば、一種の特色を具へたりしが、家絶えて、後い二條、冷泉の二流のみ、斯道の宗匠となりて、益句法のみに拘泥し、且二家互に家傳の和歌所の邑を爭ひ、訴訟とありて、代々決せず、家學の歌も、終に卑吝の調を現したるい、まことに斯道の衰兆とこそいふべけれ、かくて南北朝の時代となりていい、僧頓阿、二條家爲世の門に入りて、大に名を顯し、新拾遺の勅撰に預り、卜部兼好、及び僧淨辨、慶運と、並び稱せられて、和歌の四天王といはれたり、されども、其歌、二條家々法の中よ逍遙して、終に其軌を脱する能はず、尋て僧正徹あり、二條爲尹、幷に今川了俊に學ひ、其集草庵集、當時にありていい、やゝ見るべきものとす、さて當時の歌人の、桑門にのみ出てしい、南北朝以來、天下の爭亂、うちつゝきて、公卿縉紳、多くい戎馬の間に奔走し、文學といふものい皆僧徒の手に歸せしが故なり、足利氏の末に當りて、東常縁といふものあり、これい代々美濃の武士にて、其家祖定家に就いて歌を學ひ、終に其家と姻を結ひて、古今の傳授を受けてより、代々歌を嗜み、常縁に至りて、獨歌を以て推さる、後土御門天皇の召に應じて、京師に朝し、歌道を公卿諸家に傳へ、古今傳を宗祇に授けたり、あはれ、毎日劒戟を以て、矢石の間に奔走する田舍武士を、都に召寄せて、關白も、大臣も、大將軍も、爭ひ就いて歌を學ひしなど、當時歌道の衰頽、思ひ遣るに餘あらむ、

是より先、連歌あり、連歌い、日本武尊の新治筑波を過きて幾夜か寢つる、」の連句を以て濫觴とも、故に後世連歌の書、多くい命するに筑波を以てす、其他萬葉集、伊勢物語に、連句を載せたり、此等い、唯二人の唱和に過ぎざれと、後鳥羽帝以後い、百韵連歌なといふこと起り、足利時代にい、專ら世に行はれ、二條良基い菟玖波集を撰ひ、又僧周阿等と議して、連歌の新式を作り、其後三條實隆、夢庵、肖柏と謀り、一條兼良以下、宗砌、宗祇等の諸説を參集して、新式を大成せり、宗祇い、宗砌の弟子にて、大に聯歌を興隆し、海内風靡し、推して宗匠となす、朝廷始て花下の號を賜ふ、當時連歌の流行は、實に盛にして、各所に會を開きて、相唱和し、公卿も武士も、僧侶も神官も、皆これをなしたり、宗祇沒して後、弟子宗長、花下の宗匠を嗣く、此後松村紹巴あり、聯歌の奥秘を究め、織田信長、豊臣秀吉等の眷遇を受け、法橋に叙せらる、時に里村昌叱あり、紹巴と名を齊う

す、昌叱德川氏に仕へ、代々連歌師となり、花下の號を襲く、紹巴の門に、松永貞德あり、貞德もと和歌を好み、三條西實條、細川幽齋等に就いて、之を學ひ、和歌聯歌の奥旨を得たり、又連歌の一体に、俳句といふものあり、山崎宗鑑これを好み、犬筑波集を著し、句式いまた全く備はらず、貞德これを補正し、始めて法式を一定し、俳諧一道の宗匠に推されて、花咲翁と稱す、其門に北村季吟、松江重頼あり、季吟は德川幕府に仕へて、和學方となり、代々其職を世襲せり、季吟の門に松尾芭蕉あり、正風俳諧を創めて、大に世に稱せらる、其門寶井其角、服部嵐雪等、最も名あり、其角は寶晋齋と號し、嵐雪は雪中庵と稱す、二家の流を襲くもの、今に絶えず、さて又重頼の門には、西山宗因ありて、始めて檀林風を唱ふ、又平泉鬼貫あり、重頼及ひ宗因に學ひて、一家をなす、之を伊丹風と稱す、德川氏の世となりては、文學大に開けたれと、歌學は二條冷泉二家、依然りの職を守りて、朝紳皆これを遵奉し、古今集の如きは、秘訣の傳授を受けざれは、輙く解くべからず、万葉集の如きは、歌人の輙く讀み得べからざるものとして、之を高閣に束ね、唯其流派の、歌集抄物のみを渉獵して、自ら足れりとしたり、然るに、當時難波に、僧契沖あり、古書を攻究して、歌學の復興を圖りぬ、時に德川光國、まさに修史の事業を起して、大に古書を纂輯考証する所に、契沖の名を聞き、侍臣安藤爲章を遣して、万葉集の註釋を囑托したり、契沖即ち代匠記二十卷を著して、之を献じぬ、契沖、代匠記の外、更に記紀の歌、古今集、源氏物語、伊勢物語、百人一首等を解釋して、古言の意を發明し、又和學正濫抄を著して、音韵の濫れたるを正し、大ゑ國學を改良したり、而して其詠する所の歌詞も、敢て二條冷泉の法式ゑ拘らずして、やゝ古風を加味したり、此時に當りて、大坂に下河邊長流、江戸に戸田茂睡出てゝ、共に歌學の復古を圖りぬ、たま〳〵京都に荷田春滿あり、國學の復古を以て自ら任とし、國史律令、幷に古文辞を修め、最も万葉集に意を致せり、されとも、未た全く其志を成す能はずして卒し、姪在滿嗣きて、律令の學を修め、又國歌八論を著して、堂上風の歌弊を論したり、さて又春滿の門人、岡部眞淵は、師の意を紹述して、國學の古意を明にせんとし、專ら万葉集を攻究して、万葉考を著し、又冠辞考、歌意考、神樂催馬樂の歌の考、其他數多の書を著して、大に古意を發明し、始めて万葉体の歌を詠出して、從來の陋習を一洗し、大に海内を風靡したり、實に眞淵の如きは、家持憶良

す、昌叱德川氏に仕へ、代々連歌師となり、花下の號を襲く、紹巴の門に、松永貞德あり、貞德もと和歌を好み、三條西實條、細川幽齋等に就いて、之を學ひ、和歌聯歌の奥旨を得たり、又連歌の一体に、俳句といふものあり、山崎宗鑑これを好み、犬筑波集を著し、句式いまた全く備はらず、貞德これを補正し、始めて法式を一定し、俳諧一道の宗匠に推されて、花咲翁と稱す、其門に北村季吟、松江重頼あり、季吟は德川幕府に仕へて、和學方となり、代々其職を世襲せり、季吟の門に松尾芭蕉あり、正風俳諧を創めて、大に世に稱せらる、其門寶井其角、服部嵐雪等、最も名あり、其角は寶晋齋と號し、嵐雪は雪中庵と稱す、二家の流を襲くもの、今に絶えず、さて又重頼の門には、西山宗因ありて、始めて檀林風を唱ふ、又平泉鬼貫あり、重頼及ひ宗因に學ひて、一家をなす、之を伊丹風と稱す、德川氏の世となりては、文學大に開けたれと、歌學は二條冷泉二家、依然りの職を守りて、朝紳皆これを遵奉し、古今集の如きは、秘訣の傳授を受けざれは、輙く解くべからず、万葉集の如きは、歌人の輙く讀み得べからざるものとして、之を高閣に束ね、唯其流派の、歌集抄物のみを渉獵して、自ら足れりとしたり、然るに、當時難波に、僧契沖あり、古書を攻究して、歌學の復興を圖りぬ、時に德川光國、まさに修史の事業を起して、大に古書を纂輯考証する所に、契沖の名を聞き、侍臣安藤爲章を遣して、万葉集の註釋を囑托したり、契沖即ち代匠記二十卷を著して、之を獻じぬ、契沖、代匠記の外、更に記紀の歌、古今集、源氏物語、伊勢物語、百人一首等を解釋して、古言の意を發明し、又和學正濫抄を著して、音韵の濫れたるを正し、大に國學を改良したり、而して其詠する所の歌詞も、敢て二條冷泉の法式に拘らずして、やゝ古風を加味したり、此時に當りて、大坂に下河邊長流、江戸に戸田茂睡出てゝ、共に歌學の復古を圖りぬ、たまたま京都に荷田春滿あり、國學の復古を以て自ら任とし、國史律令、并に古文辞を修め、最も万葉集に意を致せり、されとも、未た全く其志を成す能はずして卒し、姪在滿嗣きて、律令の學を修め、又國歌八論を著して、堂上風の歌弊を論したり、さて又春滿の門人、岡部眞淵は、師の意を紹述して、國學の古意を明にせんとし、專ら万葉集を攻究して、万葉考を著し、又冠辞考、歌意考、神樂催馬樂の歌の考、其他數多の書を著して、大に古意を發明し、始めて万葉体の歌を詠出して、從來の陋習を一洗し、大に海内を風靡したり、實に眞淵の如きは、家持憶良

以來、中興の歌人と稱すべきなり、今其數首を左に擧ぐ、

ささらきの末つかた、櫻の花もやゝ盛あるころ、伊久米の君のおはしたるに、庭をはたに作れりしか、すゝなの花のさかりに咲たりければ、よみていたしける、

春されは、鈴菜花咲く、あがた見に、君來ませんと、思ひかけきや、

花の歌とて

うら〳〵と、のどけき春の心より、にゐひいてたる、山さくらかな、

秋の歌とて

大伴の、みつの浦なみ、吹きよせて、松ぐら越ゆる、秋のゆふかぜ、

嵐

信濃なる、すかの荒野を、飛ぶ鷲の、つばさもたわに、吹く嵐かな、

羈中時雨

都いて、露をいかにと、思ひしに、時雨ふるなり、宮城野のはら、

大和の國を思ひてよめる

神ろきの、神の御代より、天つ嗣、日つぎ來らしゝ、御まの尊、吾大王の、外ことは、雄々しく猛く、うちらをは、直くたひらに、見したまひ、聞したまへは、八十國も、いよゝ眞廣く、百の臣も、いやさかはえき、空みつ、大和の國は、白雲の、とにたちわたり、山見れは、山いや高し、里見れは、里平けし、春花の、うらくはしくにぞ、こゝをしも、うへ之きましき、八十國は、うへも榮えつ、いにしへの、そのいつみ代の、足り御代を、今も見るかも、日高見の國、

反歌

大たから、吾こゝろさへ、ゆたけしも、大和國原、春見てしより、

右に擧けたるが如く、眞淵、万葉休の長歌を詠み初めてより、長歌ふたゝひ古に復りぬ。其門人本居宣長、小野古道、村田春郷、同春海、伊能魚彦、加藤千蔭、荒木田久老等、競うて其學風を研究し、詠歌の風大に革れり。此中にも、古道、魚彦等は詞も、調も專ら古に據り、春海、千蔭等は、調は古に據りながら、詞は古今集以下を採れり。又宣長は、歌を詠するに、古体、近体の區別を立て、上古の言と、中古の詞とを混雜して、詠むべからざる旨を、人にも教へたり。これより後、宣長、千蔭、春海等の門流には、幾多の歌學者出て來り、天下至る所、歌を專業として、門戸を張りしものいと多し。初め大坂に有賀長伯あり、京都に香川宣阿彌あり、共に二條の流を汲みて、一家を起したりしが、後、景樹、香川

の氏名を嗣ぎ、更に一家を立てたり。其風敢て家風に拘泥せず、又其淵流の古學にも倣はず、歌は古今集を本として、上万葉より、下新古今までを參採し、更に一家を成し、其風大に行われて、下流を汲むもの、今よ絶えず。この他、富士谷成章、橘守部等、各一家を成せり。

以上三千年間の歌の沿革を考ふるに、歌はその起原いと久しく、奈良の朝には、其風最も盛に行はれ、平安の初にい、一時唐詩のために壓倒せられたれとも、延喜天暦に至りては、再ひ隆盛を極め、是よりやゝ衰微の色をあらはしたりしが、鎌倉の初に、また氣焔を吐き、是より後は、次第に委靡して、遂に廢頽したるを、德川幕府の世となりて、再ひ遠く古に復し、是より大に歌學の流行を極め、以て今日に至れり。「維新以降、文學大に進歩し、百般の事業、皆改新するにつきてい、歌の改良も、文學上の一大問題となり、唱歌新体詩等、陸續世に出つるに至れり。あはれ古を鑑み、今を照し、以て王朝の風雅を興さんい、これ誰のつとめぞや。われ〳〵い、こを將來の青年諸子に望まんとするあり。」

# 歌の作法

## 歌學

おほよそ、物感觸することあれは、必聲をはなちて、文をあす。水い心なきものなれとも、風に觸るれは、紋をあし、草木い無情なるものあれとも、春の氣に感すれい、花を開くへし。無情無心のものすら此の如し、吾人天地の間に生れ出てゝ、万物の靈長とあり、かく感し易き人情をは、抱きあから、物に感して、吟咏することを知らす、言語をもちあから、文をあすことを知らさらむい、いかに口惜しきことあらすや。されは苟も人にして思想言語の活あらんはとのものは、貴賤上下にもよるへからす、老少男女にも拘はるへからす、誰も〳〵、吾おもふことを打ちいてゝ、歌詠によせむことい、固より當然のことあり。奈良の都の頃までは、公卿縉紳いさらあり、賤の男賤の女までも、勝れたる歌をよみて、今に遺れるも少からぬい、この故なり。今の世とてもはた、然らさる理あらんや。

さはいへと、遠き古こそ、心の動くまゝに、口を衝ても出て來つらめ。中古よりは、歌の教といふこと始まり、且詞も聊變遷あり去かは、今い一通り、その教をうけて、この道に

い入り立つへきあり。其教といふも、高尚に論し究むれは、天地に亘り、造化に參し、頗廣大無邊なれとも、淺近ふ論すれは、又甚容易なるものなり。學生い、課業の暇にもこれを咏することを得、農樵漁丁は、勞役の間にも思を搆ふることを得へし。さてその効用にいたりては、大にしては天地を動し、鬼神を感せしめ、小にしては勞苦を忘れ、心神を慰め、紅塵紫埃の境界中、別に清淨幽妙の天地を開闢せしむる妙あるものなり。」藤原基俊の悅目抄にい、歌はよむことの難きにあらす、善くよむことの難きありといへり。善くよまむことこそ難からめ。おみ〳〵によみ習はんは易かるべし。易きよりして難きに入り、一わたり習ひ得たらむ後は、遂に堪能の境にも分け入らるゝあるべし。さては初學の徒い、まつ卑より高に登る工夫こそ第一なれ。

歌を學ふ法則は、代々の學者の、萬に說きおかれたるものいと多かり。その中には、株を守り舟を刻むといふことく、今の世に適切あらぬもあれは、初學に通せぬも少からす。こゝには、初學の徒の詠歌に志さむものゝために、其宜しきを取りて、要領を述へむとす。されと先輩の說、古に泥みて、事に害あるものは、斷然これをすて、足らさる所は、新に創意して、一体を開けるもあり。見るものその意して、深く思を致すへし。

## 歌いむつゝしきものにあらざる事

歌に志あるものい、今の世より多きことなれと、大かた志いあれとも、歌詞を知らねいとて、遂に屈するものあり。これ大なる誤なり。歌詞とて、一々別なるものにいあらす、大抵今の普通語にてよろしきなり。名詞にいたりてい、古も今も變ることなく、たゝ動詞ばかりは、やゝ異りあれとも、其雅にして正しきを擇ひ、こをあやなしてよまんにい、いつれか歌に入らさらむ。且歌詞を多く知れいとて、自由によまるゝものにもあらす。かの大工を見よ、多くの善き材木を集めて貯へたれはとて、手に技能なくてい、これを組み立て、建築することい、むつかしきものそかし。」

されい初の間い、わかおもふまゝを言ひ顯いして、辞達せんことを主とすへし。奇を好み巧を搆へむとすれい、却て理窟に陷り、然らされい迂僻にありて、はてい邪徑にふみ迷ふものなり。かつ歌い理想上より來らす、專ら感想上より言ひ出てむことを要す。故にその意思い、幼くして愛嬌あり、品格い、高くして氣韻あらむことを要す。かくなることも、

畢竟ハ各已か志を述へて、辞達するまての事あり。橘守部曾て此例を示して曰く、たとへハ人、山の花を見やりて、

まう、櫻の花か咲いたらしい、あの向の山のかひから、白い雲のやうに見える、

かゝる思のおこらん時、これを五七五七七の句につらねて、歌にすれハ、

さくら花咲にけらしもあし引の山のかひより見ゆるしらくも

月のよく冴えたる夜、鴈の飛ふを見てハ、

おち雲に羽うちかハし飛ふ鴈の數さへ見ゆるあきの夜の月

雪のちら〳〵と、花のやうにふり來るを見てハ、

冬ながら空より花のちりくるハ雲のこあたハ春にやあるらむ

大方ハ、斯の如きものなりといへり。又香川景樹も、曾て客の、歌よむやうを問ひしに、答へて、即事を心に感したるまゝに、よむがよしといへる時、門前に豆腐賣る聲のきこえけれハ、景樹即座に、

それそこに豆腐の聲ろ聞ゆなるおさん出て見よ行き過きぬ間に

と口吟して、先このやうな譯のものなりといへりとそ。これらハ、即興をよむについて、いへることなり。もし題につきて詠まむとするときハ、よく〳〵題意を汲みわけてよめは、更にむつかしきものにあらす。

## 題目の事

歌に題を設くることは、雄略帝河上の小野に御幸の時、蚍飛ひ來りて御腕を刺しけるに、蜻蛉來りて蚍を嚙み去りぬ。帝蜻蛉を感し給ひ、群臣にあきつを褒むる歌よめと、勅ありけるそ、題を設けて歌よむことの濫觴なるへき。万葉集には題詠數知らすあれとも、大方歌ありて後に、意を汲みて題を加へたるも多かるへし。中古になりて、屏風の繪につき、或ハ歌合によりてよめるおとや、題詠の世にひろこれるとしめならむ。されと當時は、題意廣くして數また少く、紛るへきものあけれは、題の文字をこと〳〵くよみ入るゝもあり、大畧なるもありき。中古の末より、大方題詠にあらさるはなくなりてハ、一題かず〳〵に分れ、難題おもひ〳〵ゝ作り出てたれハ、題意狹く、障碍多く、趣を得ること難くあれり。これ題詠の一弊おらむ。

そもく、歌は物に感して後に、よみ出つるものなれば、先題を定めて後に、想を起すものあらぬことい、いふまでもなし。されど中古以後、題詠の事專ら行われたれい、今は初學の徒、この門に入らんには、先題詠より習ひ入るにい若くへからす。故に橘守部ら、世に題詠はしまりて、歌衰へたりなといふ說は、てにをはも口に失はす、俗言雅語のへたてもなく、自歌によまれけむ昔の事にこうあれ、稽古せねはよみ習ひかたくなりし世の人に、題詠いすあ、只見る事聞くことにつきてのみよめといはゝ、いかに拙き事をかいひ出てむといへり。まことに實際に通したる論といふへし。

題詠を習ふにつきて、先斟酌すへきことあり。そはこれまての慣例にて、類題の諸集、又い類語の書とも、皆四季戀雜に分ち、その中にい種々の題を小分したれど、要するに春夏秋冬の景物と、男女愛慕の情と、詠物等に過ぎさるか如し。殊に戀は男女のみには限らすといいへ、忠君愛國の情あとは、戀の内によむへきやうもあし。又瑣細の器物なとをはよめとも、史傳につきて、古來の忠臣義士孝子節婦を稱詠することい甚少し。男女戀慕の思をは盛によめとも、忠君愛國の士氣をは發揚すへき歌の部門を立てす。端午七夕の五節供あとをい擧けたれとも、紀元天長なとの三大節をいよむにはしなし。但舊撰の類語の書は、皆維新前のものなれは、今よりこを尤むへきものにいあらされと、今日に於ては、これを固守すること陋ありといふへし。故に今新に創意して、部門を立て、新題目をも列へ擧けたり。これ今の大御代に缺くへからさるものなれいあり。

## 題の文字を上句によみはてぬ事

題の文字を、上の句に皆よみはてゝ、下の句にいふへき事のなきまゝに、用もあき事ともをつゝけたるいと見くるし。例へい鶯といふ題を取りて、先つ鶯のとよみ、鹿といふ題を得て、小男鹿のと言ひ起すを、わろしとするあり。初心の人の一首の首尾をもおもひ定めす、題のまづ目につくまゝよ、よみ出てゝ、下句にいたりて、よむへきことのあきに、困むこと多きものなり。或人の山家の卯花といふ題を取りて、山里の垣根に咲ける卯花いとうちいてゝ、下の句に困み、わき壁ぬれる心ちこそすれ」とよめる話も、この弊より來れり。心すへきことにこそ。

## 題をもてあすと負くとの事

歌の意のつけさまによりて、題をもてなすと、負くとあり。例へい月に雲をかけ、花に風を吹かせおとするい、正格ならす。或い春の月をさやかありとよみ、秋の月をおぼろありとゝかめ、春雨五月雨の晴れ易き、夕立時雨のしめやかなる、おもむきなとい、わさと好みてよむへからす。すくれて秀逸なるい、この限にしもあらねと。

## 題字をふくめてよむ事

題字をふくめてよむ事あり、常の事あり。唯その置きやう、續けさまによりて、佳惡あり。其例一つ二つを擧けむ。

山花　　従三位季

さかぬ間い花かと見えし去ら雲に又まかひぬる山さくらとな

忍戀　　従三位頼政

あさましやおさふる袖の下くゝるなみたの末を人や見つらむ

雪朝望　　前大僧正慈鎮

あかめやる心に跡はつきにけりあしやのさとの雪のあけはの

これらの歌によりて、題の字の配合の如何を悟るへし。

## 題をかくしてよむ事

題をかくして、よむことあり。上手ならてい難きことあから、廣き題にい、常にあること

あり。これも其例二つ三つを擧けむ。

春駒　　後頼

春ふかみ尾花あしけの見えつるいひきたかへたる心地こそすれ

紅葉　　後京極攝政

下葉まて心のまゝに染めてけり去くれにあける神あひのもり

牡丹　　讀人不知

咲きしより散りはつるまて見し程に花のもとにて廿日へにけり

この歌い、牡丹の異名を、はつか草といへれいなり。

結題にてい、一を顯し、一をかくしてもよめり。ことくくかくしてよめるもあり。

松鶯　　頼政

わかめかる春にしなれい鶯も木つたひわたるあまのはしたて　大中臣公忠

山花留人

斧の柄いこのもとにてや朽ちなまし春をかきらぬ櫻なりせい　俊成

暮見落葉

木のもとに今たゝえし來さりせいまことに夜の錦おちまし

いつれも、名匠の手きいおらさるいおし。

## 題の虚字の事

題の虚字にい心すへきことなり。そは虚字にも、常にいよむ字多かれとも、題中に結ひたるものい、すへて外の詞に言ひめくらしてよむへきおり。句中に顯してよきもあれと、それい稀なり。虚字とい、前、後、稀、多、年々、時々、長、短、遲、速、早、期、初、終、盡、延、增、添、進、飛、落、隔、招、對、驚、愛、知、不改、不異、などの類の如し。たとへい鶯聲稀といふ題にて、直に聲稀なりなと讀ます、只なく日すくおしとも、久しく聞かさりつるに、今こそめつらしけれなとやうに讀むをいふおり。月前遠情といふ題あれい、うちつけに、遠きなといふ詞を顯さす、月を見れは、更科おはすても心にうかひ、唐土までも隔てす、おもひやらるゝさまをよむおり。古歌にて例をあけむに、

紫藤藏松

松風のおとせさりせは藤おみを何にかゝれる花と去らまし　良選法師

風傳隣花

櫻散るとおりにいとふ春かせい花なきやとそ嬉しかりける　坂上定成

寒草纔殘

ふく風のはらふ木の葉の下はかり霜おきはてぬ野への冬草　藤原定家

また題の字をよみ落そことは、深く愼むへきことなり。これをい落題と稱して難したり。されと、わさと其字をおもはせてよむことも、希にいあり。左の歌の如きは是なり、

紅葉浮水

筏士よまてことゝはむ水上はいかはかり吹く嶺のあらしそ　資守朝臣

落花

殿もりの伴のみやつこ心あらはこの春はかり朝さよめすな

これら、皆その境にのそみてよめる体よて、題をはことさらよ省さて、おもはせたるなり。又さしかきある歌には、其前文に讓りて、其物を省くことい、常の事なり。八雲口傳に、五月四日歌會時鳥と題して、

五月雨にふり出てなけと思へともあすの菖蒲のねを殘すらむ

とある歌を、此歌落題と難したり。これ端書あらはよろしかれと、題詠にてありあから、時鳥のこと落ちたれはなり。これらにて、題詠とはし書ある歌との別を知るへし。傍題といふことあり、傍題とは題の物の外に、他物を讀み添ふる時、その添へたるものに、主意を取られたるをいふなり。

うくひすのさつ〳〵鳴かすは梅の花けのこる雪に猶もまかはむ

これら鶯の題にてよみたるを、梅の方に重を取られたるか故に、傍題の難ありといへり。

## 作例の事

歌をよむには、古歌を見ならはすは、道に入りかたし。貝原益軒の如きは、年八十に及ひて和歌に志し、先つ古今集を暗誦せりといふ。多く古歌を知らされは、自在に取りまかなふこと能はす。但その集は、初心の中には、近き頃の人の類題集より入り、やゝ熟して後い、代々の勅撰、さては各の家集にも分け入るへきなり。すへて我おもひよりのあらむたけは、自らその風情を案して、よみ出つへきことなれと、「初心の間は、さもありかたきものなれは、初は類題、その他の作例の書につき、彼所を少し取り、此所を少し取りつゝ、一首につゝりあすも一の方便なるへし。」これ古歌の中を剽竊すともいふへけれと、全く初學の間のことにて、かくしてよみたるを、我歌として、集にのせむといふにもあらす、只稽古習學のためなれは、さして害なかるへし。「かくする中に自然と習熟すれは、はては己かものとなりて、さま〳〵新機軸を出すことを得るに至るへし。」古歌を取るについては、俊成卿の和歌肝要に、和歌い神代より始まりて、今にたゆる事なけれは、言ひのこしたるふしもなく、つゝけのこしたる風情もなし。末の世の人、いかてか新しくいとりなすへき。然れとも、人の心面の如くなれは、少しはかはらすといふことなし。其樣おのつからかはりぬれは、苦しからさるものなり。又定家卿の式にい、おもひより盡きて、歌のいて來さ

る時は、何なりとも見てよめといへり。初學の徒、一物もなき腹をさくりたりとて、何事をも案し出すこと難かるへし。かゝる時は、いにしへの歌を見て、情趣を喚ひ起すこともあるへし。

## 名所の事

名所は、古人か花月よつきて、その地の景勝を愛し、又は羈旅の折に、景物名稱おとの感にふれて、咏し出せるか、後世遂に名所となりて、歌によみ入るゝことゝいなりしものなり。されは名所の地、必すしも景勝に富めるにもあらす、名所ならぬ地、却てすくれたるか多きなり。まして桑滄のは、數の免れさる所なれは、古にありて、今い其所の詳ならぬ所も、まゝおほし。たとへは富士の根の烟も、今は絶え、まゝの繼はし、なからの橋、ともにたえて久しく、住吉の松は波かけす、大淀の浦い松なく、水無瀬い水あれと、なしとよみ、其外宇陀野の御狩、大堰川の鵜舟なと、ひさしく絶えたることなれと、猶あるやうによみなそこと、理においてあるましきことならすや。

そも〳〵、爲家卿口傳に、名所をよむこと、常に名高く聞えたる所をよむへし。但し其所に臨みてよまむは、耳遠からむも苦しかるましきありともありて、常には古人のよまさる名所は、用ゐさるやうにおれり。延享の比にや、某卿の江戸に滯在せし時、ある人飛鳥山の歌乞ひしに、古人のよまぬ所は、名所としかたしとて、よまさりきといふ。これまた謂おきにあらす。されと、古の名所は、既に陳迹となりて、今の名所新に出つるは、世々の習なり。古の名所い既に古人に諷詠せられ、跡亡ひ地失せて、其名は尙千載の後に傳れり。今の名所はた、今の歌人よ諷詠せられさらむには、誰か名を後の世に傳へむとかする。もし今人をして、唯古人の陳迹を追ふことをなさむには、顯い益顯、幽は益幽にして、勝地の幸不幸はまた甚しからすや。されは今の歌人い、古の今に傳れるもの い固よりにて、古なくて今ある勝地をも加へてよむべきなり。

然りといへとも、これはその理につきていふのみ。初學讀習の初には、いつこの名所をよみ入れむも、今に絶えたる名所をよまんも、何の妨かあるべき。たゝこれを集なとにして、世に弘めむとには、いかゝあらむ。

さて名所をよまんとならは、又心得あるへきことあり。國々の名所い其數多けれと、其歌

の姿によりて、取るべき所と取るへからさる所とあり。この取捨を審にせされは、歌の意、浮きて固からす。心の種に、これを論して曰く、たとへは、

明かたのみ空のほかのほとゝきす玉のよこ山なきて過くなり

いつしかとめつらしきかなをの山の松のうはゝにふれる初雪

この名所のよみ方、其山にはかきらて、玉の横山をくらはし山とも、わかしの浦にとも、何とも引きかへられ、をの山を鳥羽山のとも、須磨の浦のとも、いかやうにも取りかへられて、其所のかひもなし。古人の歌には、大かたよせをそへて、其名所の動くましきやうにそよみたる。

常盤山かはるこずゑはあらねとも月こそ秋のいろは見えけれ

ふる雪に杉の青葉いうつもれて去るしも見えすみわの山もと

これらは、其地名によせ、物によせて、名所の動くましきこと、前の歌とくらへて知るへし。また

よしの河いはせのおみによる花や青ねかみねにきゆる白雲

秋まてはふしの高嶺に見し雪をわけてそこゆるあしからの關

これらは、其地に近き地をもてかさへたり。又さらても、歌にとりてよせあるをは、とりてよむことともあり。

霧はれぬをくらの山のたかねより聲はかりして鴈わたるなり

ゆきふれは去らぬ翁のかゝみ山松もさなからおもはかりせり

おと、かもひ合すへし。

## 鍛錬せさるへからさる事

鍛錬というちきたゆるなり。鍛工の鐵を錬るか如くするをいふ。これ歌に限るにあらす、文章も同しことなり。この工夫を用ゐることの精粗によりて、巧拙の二つに分るゝあり。たとへい一首の歌をよみ出てゝ、則詠するに、首尾よく調ひて、よろしき樣に覺ゆとも、時立ちてよく考ふれい、案の外に疵を見出すことあるものあり。然るときい、工夫してこれを改め直す。かくすること再三にして、完全無疵あらしむるにいたるへし。古の詩家か、五日に一石を壽き、十日に一水を壽くといひ、詩人か三年に一律を作り、十年に一賦を賦

すといふ。皆鍛錬の工を費すかためあり。一氣呵成の句に、よきもあれど、それゝ希なるものなり。よく鍛錬の上にも鍛錬して、百錬の鐵となすことを心かくれゝ、その工夫つもり積りて、上達の域に入るへし。

柿本人麿の如き、歌聖といはれし人にても、猶鍛錬せしことゝ、明かなることにて、万葉集に載するものと、家集にのするものと、その句のことなるあり。また同集中にあるものといへとも、前後その句の同しからさるなと、皆その證あり。紀貫之か、一首の歌に廿日を費し、たり、なといふことも、名高きことあり。その他世々の歌人の傳記、および遺稿等を見もてゆくに、その例いとゝおほかり。こゝに香川景樹の遺稿中あるものをとり出てゝ、その用意如何を示さむ。

浮雲のたえまあまたにありぬありやかても月のすまむとすらむ

この歌の句を前後して、

月影ゝやかてそむへしうき雲のたえ間あまたにありにけるかな

と直されたり。初の歌と後の歌とを比較すれゝ、後の歌のたちまさること萬々ならむ。景樹の如き歌人にて、猶かくの如し。初學の徒かへりみでやゝ。

## 狂痴といふ事

狂痴とゝ、心の幼く、あとけなき趣をいふ。歌の文と異なる所ゝ、何の整否のみあらす、幾分かこの狂痴の態あるによりて、判別するあり。文ゝ理によりて論し、實を取りて記す。歌ゝ理窟にかゝはらす、事實によらすして、興趣を添ふることあるものなり。遠山の櫻を見て、雲かと疑ひ、草葉に置ける露を、玉かといふかり、白頭をかこちて、白髮三千丈といひ、瀑布をみてゝ、銀河落九天と疑ふ類、皆これなり。蓋、悲喜戀哀の情の盛なる時ゝ、見るもの聞くものにつけて、正當の判定を失ふものなり。歌ゝ正にこの境に發す、理論を以ていふへからさる所に、却て感情あるをいふものなり。古人の、歌ゝ幼くよむへしといへるも、この故なりと知るへし。

## 俳諧にれちいらぬやうすへき事

俳諧の歌とは、滑稽なる歌をいへるものにて、正歌にはあらす。故に古今集なとにても、これを正歌と區別して載せたり。世人、ともすれゝ、この俳諧に陷りて、その俳諧なることを

知らぬものおほし。心すへき事なり。左に、古今集の俳諧をぬき出て、示さむ。

山吹のそこの色こそあらはなれとへとこたへぬ口なしにして

むつ言も又つきなくに明けぬめりいつちい秋の長してふ夜を

秋くれい野へにたとる、女郎花いつれの人かつまて見るへき

秋きりのそれてくもれはをみなへし花の姿そ見えかくれする

秋風にほころひぬらし藤袴つゝりさせてふきう〳〵すなく

冬なから春のとなりのちかけれいなか垣よりそ花はちりける

## 歌疵の事

歌格の誤謬よりして、あたら玉に疵つくることあり。これによりて、八雲御抄にい、喜撰式の八病、四病、濱成式の七病など、さま〳〵あげて戒められたれと、事甚細碎なれい、初學をして、こと〳〵く此則に從はしむるときい、跼天蹐地の想あらしめて、十分辭意を達しかたかれい、今い疵病の尤大なるものゞみを擧けて、愼む所を知らしめむ。

(一) 古歌の句詞をいひうつして、取ること、最見くるし。

古今集忠岑の歌に

春きぬと人ハいへとも鶯のなかぬかきりハあらしとそおもふ

古今六帖讀人志ちすの歌に

冬きぬと人ハいへとも朝氷むすはぬほとハあらしとそおもふ

右の外、そらに知られぬ雪そふりけるといふ本歌をとりて、月の歌に、水に知られぬ氷なりけり、とよみかへたるか如き、これなり。

(二) 奇僻なる造詞を用ゐる事もまた見くるし。

春の曙、秋の夕暮といふへきを、巧みて、曙の春、夕くれの秋などよむ人あり。うけられぬ事なり。この外こよひの月を、月こよひ、をちこちの野を、野へのをちこち、なといふ類のいやしき詞多し。皆心すへきことなり。これなほ正しき官道をすてゝ、荊棘生ひ茂れる細道をたどるか如し。新しきとよきとハ、歌の趣にありて、詞にハあらぬものなり。

(三) 題を言ひ述へたるのみにて、註釋めきたるい、趣を失ひてわろし。

歌に趣向をつけて、一ふしなきい、風情なく、感を深くせす。古人の秀歌の中にい、かゝ

るもの尠からねども、初學の題詠にい、むげに聞かれぬものといふへし。山邊の赤人の、

田子の浦ゆうちいで、見れい眞白にそ富士の高嶺に雪い ふりける

の如き、何の趣向もなけれど、實地にのそみて、實景をそのまゝいへるい、高手よなりて

の後のことなり。初心にい、題の註釋めきたちむやうなるい心すへし。たとへい、獨摘若葉

といふ題にて、

春あさみ雪けの水に袖ぬれて澤邊にひとり若葉つむあり

山花始開といふ題にて、

いつしかと待遠かりし山さくらけさこそ花は咲きそめにけれ

などの類、たゝ題を言ひ述へたるのみなり。もしこれを同し心なから、言ひ換へて趣をつ

けむよは、左の如く讀むへきものそと、前哲いいへり。

雪消せし野澤の水に影見れはひとりは摘まぬ若葉ありけり

いつしかと待ち〳〵て又山さくらけさより散ちん事をしそ思ふ

（四）同し文字を二所に入るゝ失。

同し文字を二所よ入るゝことい、必あるましきことなり。例へは、

さつき待つ花橘の香をかけいむかしの人の袖の香そする

これら古歌の名高きものよて、香といふことを、強くいとむとの意に出てしものあめれと、

初心の徒は、墾に傚ふへからす、

（五）語格の誤れるもの

歌の趣向いいかによくとも、語格にかあとぬ歌は、完全ある歌とはいひ難し。例へい、

春いまたあさ瀬の水やこほるらむ河邊の小草もゆるともあし

もゆるとも あしいもゆとも あしといふへきあり。

着あらせし春の衣をぬきかへてまたしも春にわかれぬるかあ

きあらせしいきあらしゝといふへきあり。

老らくの身い朝寢せぬあらとせを強めてとのみ人のいふらむ

あらとせいあらとしといふへきあり。

かひあきや學のまといあけやらてわかよふけゆく燈火のかけ

かひなきやいかひなしやといふへきあり。

くまもなくかたりつくせし宵の雨のふりぬることを誰か傳へし

つくせしいつくしゝといふへきあり。

かくるゝやいかにと見れはふしのねのあたりの月も高く行らむ

かくるゝやいかくるゝかとあるへきなり。

もちちかみ高嶺の雪やきゆるらむてる日にまさるふしの川水

きゆるらむいきゆらむとあるへきあり。

みゆきせしさか山松の深みとりちとせふるともいや榮ふらし

ふるともいふともといふへきあり。

さくらさく遠山もとの里人い田にたちつかることやあからむ

つかることやいつかるゝことやとあるへきあり。

きのふまて氷の志めし小山田を春にまかせるみつのこゑかな

るいまかするといふへきあり。

長月の月のさかりにまたも見むまたささみちぬ白きくの花

ささみちぬいささみたぬといふへきなり。

山川の岸をひたりてゆく水にぬるてのもみちちらぬ日そあきさ

ひたりていひたしてといふへきなり。

何事をつけのまくらそさゝの葉のさゆる霜夜に我をねさゝぬ

ねさゝぬいねさせぬといふへきなり。この他、係結といひ、自他といひ、時刻といひ、いと

みたりなるものおほし。文典なと、一わたり心得て、そのあやまりに、おちいらぬやうす

へし。

## 歌の書式

歌は、我國固有の美術にして、書も亦さかなり。美妙の書をもて、美妙の歌をかゝむとするにゝ、自その法則によりて、美術の美を滿足せしめさるへからす。いかに歌はよくとも書拙からむにゝ、大にその美を失ふへし。歌巧にして書美ありとも、その式にかなはすは、壁の寸瑕あるゝ如し。壁の美を失はすとも、瑕あくして全きにゝ如くへからす。そもそも物あれゝ則あり、今の人の言の如く、事さへ足れはよしといひて、濫に記さむよゝ、心あるものは、いたくこを卑しめあむ。

### 詠草書体

詠草にゝ、竪詠草と折詠草とあり。竪は正しき儀式に用ゐ、料紙ゝ杉原とす。折詠草は略式なり。二枚重ね四折にす。一枚ゝ草案の料、一枚は宗匠に奉りて点を請ふ料なり。宗匠の一覽をへて後、懐紙または短冊にかくなり。

右は本儀あれとも、今ゝ料紙の如きゝ、半紙を代用して、書式のみ舊法にゑたかふもよろしかるへし。

## 題詠草

櫻　　真淵

うら〳〵とのとけき春のこゝろより
にほひ出てたるやまさくら花



## 二首をかく時の書式

題　　名

……

……

……

……

## 折詠草題多き時の書式

### 一題の時の書式



| 題名 | 真淵 |
|---|---|
| 夕立 | 大ひえやをひえの雲の<br>一めくりして夕立をかり<br>粟津野の原 |
| 題 | |

上

十二字
十二字
七字

詠草ハ添削を乞ふものなれハ一題に付必二首つゝをよみて認むへし

## 懐紙書体

懐紙にハ、一首懐紙、二首、三首、五首、七首、十首、十五首、二十首、三十首、五十首、七十首、百首などの式、さま〳〵あり。季の同しき書に上下の差別あり。女房、沙門、兒の書法あり。みなそれ〳〵の定式あり。料紙は内宴には、よき引合を用ゐ、公宴には讃岐檀紙を引合より、高くたちて用ゐるなり。されと大方は、大高檀紙よて、長一尺二寸五分許なり。字配ハ、九字十字九字三字と配りて、四行にかくへし。然れとも宿、家、君、月、花等の字きるへからす。とりわけ末の三字にハ式法あり。たとへは、

山さくらはな　はるのやなきか　やとのうくひす　夜半のつきかけ　あとの類

三字にはかきかたし。これをは　梅はな　楊柳か　乃黄鳥　月嘉氣　なと〻書くへし。

春日の時にハかくかき夏日ハ夏日とかく秋冬之に倣へ

歌ハ懷紙よりかきり一字ごとにハなしてかくなよしとす三字以上をかきつゝくるはわろし上ハ大かた一寸一二分あけてかくへし

○印ハ墨つぎ也

△印ハ中すみ也

（この間手のひろさたけあけおくへし

春日詠……

歌

官位姓名

きみか代と。千代にハ

千代に。さゝれいしの。いと

ほとなりて。こけのむ

須麻天。

姓は濃墨にかき名は淡墨にかくを法とす

九字

十字

九字

三字

これハ眞假名にかくべし





大かたも

おかめせしかと

この秋の

ゆふへはことに

さひし

かりけり

蒼生子

懐紙二枚つぎの式

詠五首歌　景樹

春月

なか〳〵ま雲はたえまなくまたれけりかすみはてたる春のよの月

水邊納涼

大井川たえす吹さおろす山松のあらしのかけは夏なかりけり





馬上紅葉

もみちはのこき一葉こそちりまけれわか乘る駒の黒髪の上に

夜雪

てる月のかけのちりくるこゝちして夜ゆく袖にたまる雪のな

嵐

くるゝよりやかてふきたつわか山のあらしの末をたれかきくらむ

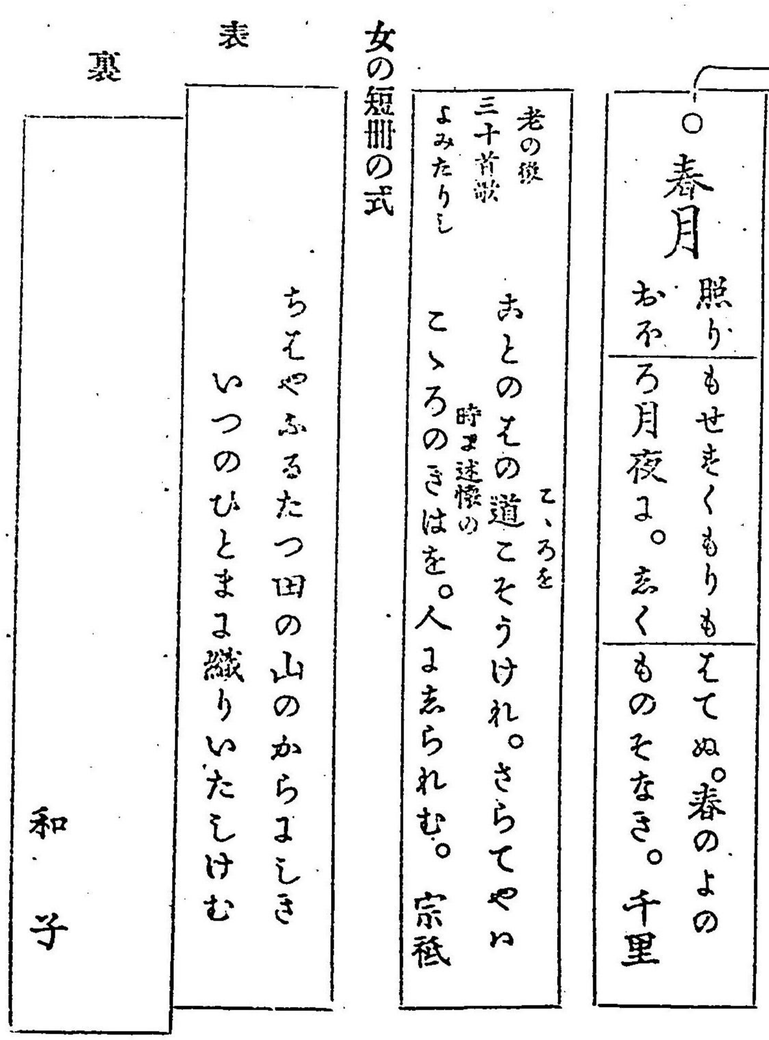
## 短冊書体

短冊の雲形ハ、青雲を上とし、紫雲を下とす。一字二字三字題までは、題をは一行にかき下し、四字題は二行にかくなり。四字五字もまたかなし。但し熟字をは切るへからす。假名題はちらして書き、假名何題もかなし。詞書多きは、ちらしかきにかくなり。歌の左右よかくこともあり。

歌は、初句にて筆をおこし、三の句にて墨つぎし、五の句にて墨をつくなり。いつれも二行なり。但し行の初の兩行ともに、假字なるは妨なし。共に漢字なるは、避くへきものなり。これ見くるしければなり。

名をかくことは、名の二字通例なり。但し姓名ともにかくも、稀にはあることなり。女流には、上の句の末を、一二字ほどあまして、わきにかき、下の句を一字さけて、書くこと、常のことなり。されとあまさゝる体もあり。さて名は裏にかくなり。

代筆の短冊は、表に作者の名をかき、裏に筆者の名をかくへし。



## 題の書式

橋
五月雨

五月雨
晴

春風至
氷解



## 色紙書体

色紙のかき方いさま〳〵あり。今その一例を左に示さむ。

### 第一式

ひさかたの。ひのり
のどけさ。はるのひよ。
ちつこゝろおく。
そおのちる
らむ。

○印ハ墨つきを示したるものなり

## 第二式

こをあてるのよ。
いまを
おくある。

音羽山。
今朝こえ
くれは。
ほと、
きす。





## 第三式

おきゐたる。かりの
おみたや。おちつらむ。
ものおもふ
やとの。萩の
うへの露。

## 第四式

みよし野の。
やまのしらゆき。
つもるらし。
ふるさとさむく。
おりまさるゝ也。



# 類語及び作例

## 節序

### ○一月

**新年**（あたらしきとし）

年立つ朝の景色、及び百官の朝賀の狀より、人々相集りて悅ひかはすこと、また國旗、松飾など、總て新年に關したる、儀式遊戲等の事をよむべし。

**立春**（たつはる）

春の立つ日を、氣高くよむべし。早春、初春などゝ混ふ可らず。

**初春**（はつはる）　**早春**（はしめのはる）

春立て、三日四日間の事を、專とよむべし。霞も未た立たず、鶯の聲の、待ち遠おる心おとにてもあるべし。

朝日かけ　朝日の御旗　若みつに　御旗のなびき
門松の　餅ひのかゝみ　玄めとへて　ことしのはしめ
くすり酒　年たちかへる　馬くるま　鶴のはつこゑ

年のはしめ　月日のはしめ　あけがらす　朝日のゐまひ
けふをこそ　あくれバやがて　いつる日も　けさ鳴く鳥は
朝ぼらけ　けさ鳴く鳥さへ　國がらか　あふくみ空
君か代の　千年をこめて　親をいとひ　けふくみそむる
神代より　雪もかすみて　あらたまる　豊さかのぼる
寶田の　千代田の雪に　大御代の　ほと〳〵いとふ
夜のまより　むかふ日影に　天つみ空　君をいとひて
鞠をつく　いとふ諸人　羽をうつ　車のひゝき
をさな子の　老もわすれて　千代にませ　君か代の春
人こゝろ　春たつらしも　春來ぬと　春や來ぬらん
春のくる　天つ空より　立そむる　春くるみち
春にいま　春てふけふゝ　春めきて　春といふ名
春といへゝ　春まちえたる　春の空　春ゝのとかに
あまの戸　うらゝに出る　よもの春　松のみとりも
のとかある　春とゝゐるし　東より　年あるみ代の



日の本の　このめも春　から國も　枝ゆたかに
いくめくり　めくみあまねき　春あさみ　草もえ出る
けふといふ　千里をかけて　春の色ゝ　春そあまねき
けさ見れゝ　千年のかけ　春けしき　春ともいはす
空みれば　きのふの空ゝ　谷風に　蘆のつのくむ
やがらかに　きのふに似ぬ　めもはるに　春をしらする
つゝらゐし　みかみの枝に　春の風　水のしらなみ
かけの聲　峯のよこくも　雪げの　春のはつ花
うすかすみ　初日の光り　天つそら　つら〳〵のとくる
氷とく　空よりみえて　山もまた　霞みわたりて
春にあふ　天地のめくみ　玉かきの　梅のほゝゑむ
はつ夢の　九重の雲ゐ　九重の　朝戸あけて
高ねより　山もかすみて　氷ゐし　また風さゆる
むらきえの　あわ雪そふる　遠山に　野つら山つら
柳にも　浦風ぬるく　朝風に　春におくれぬ

春うれしくも　世いやや春に　打さらしふる雪　世い春なれや
雪げなからに　氷くたくる　かけひのこほる　とくる氷の
草もみどりに　角くむあしも　荻の焼生　うそかすみせり
小さゝ原より　さゝ波よする　山へのぞけき　かすむも寒し
高根かすみて　ほころびそむる　宿のあそひ　かすむかたより
谷風ぬるみ　春しりそむる　かすむともなし　また風さむみ
春日のにほひ　朝日のとけき　さかゆく春に　春來るらし
春めきにけり　道あるはる　いくよの春　此春よりは
花鳥の春　春日たのしき　春やいつこ　春さりくれい
八十島かけて　春にあけ行く　春し來ぬれい　霞まぬさきに
まだ鶯も　氷いとけて　袖ふく風に　都のそらも
心のとかに　年たつ今朝の

○

万月よめはいまだ冬あり云かそがに霞たなびく春たちぬとか　家持
同　あたらしき年の始にとよの年云るしとあらし雪のふれゝば　諸會



同　久かたの天の香具山この夕べかすみたなびく春たつらしも　讀人不知
同　昨日こそ年いはてしか春かすみかすかの山にもや立にけり　讀人不知
同　霞立野のべのかたに行きしかば鶯鳴きつ春にあるらし　乙麿
同　冬過て春きたるらし朝日さす春日の山にかすみたなびく　讀人不知
古　年のうちに春はきにけり一とせを去年とやいとむ今年とやいとむ　元方
同　雪のうちに春いきにけり鶯のこほれるなみだ今やとくらむ　二條后
同　袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつ今日の風やとくらむ　貫之
後　春立ときゝつるのちに春日山きえあへぬ雪の花と見ゆらむ　躬恒
同　いつの間にかすみ立つらむかすか野の雪だにとけぬ冬と見しまに　讀人不知
同　花だにもまたさかなくに鶯の鳴くひとこゑを春と思はむ　讀人不知
同　春くれは花見んとおもふ心こそ野べのかすみと共にたちけれ　因香
同　水の面にあやおりみだる春風や池のこほりを今日いとくらむ　友則
拾　春たつとけふばかりにやみよし野の山もかすみて今朝い見ゆらむ　忠岑
同　春かすみたてるを見れいあら玉の春は山よりこゆるなりけり　文幹
同　年月のゆくゝもしらぬ山かついゝ瀧の音にや春を知るらむ　右近

拾　かきくらし雪もふらぬん櫻花またさかぬまはよそへても見む　讀人不知
後拾　東路ゝなこその關もあるものをいかてか春の越えてきつらむ　師賢
同　紫もあけもみとりもうれしきは春のとしめにきたるなりけり　輔尹
同　春のくる道のゑるべゝみよし野の山にたなひくかそみなりけり　能宣
同　谷川の氷もいまたとけあへぬにみねのかすみはたなひきにけり　長能
金　いつしかと明けゆく空のかすめるは天の戸よりや春ゝたつらむ　顯仲
同　いつしかと春のゑるしにたつものはあしたの原のかすみこそけり　長實
詞　きのふこそあられふりしかゑからきの外山のかすみ春めきにけり　惟成
同　氷ゐし志賀の辛崎うちとけてさゝ浪よする春かせそふく　匡房
千　君かためみたらし川を若水にむすふや春のはしめなるらむ　俊頼
同　春のくるあしたの原を見わたせはかすみも今日そたちそしめける　俊頼
同　三室山谷にや春の立ちぬらむ雪の下水岩たゝくなり　國信
同　雪ふかき岩のかけ道あとたゆる芳野の里も春ゝきにけり　右大臣
同　山里の垣根に春やゑらるらむ霞まぬさきに鶯のなく　隆國
新古　今日といへゝもろこしまてもゆく春を都にのみとおもひけるかな　俊成
同　かきくらし猶ふるさとの雪のうちにあとこそ見えぬ春ゝきにけり　宮内卿
同　春といへゝ霞にけりな昨日まて浪まに見えし淡路しま山　俊惠
同　みよし野ゝ山もかすみて白雪のふりにし里に春ゝきにけり　攝政太臣
同　春くれゝ袖の氷もとけにけりもりくる月のやとるばかりに　行尊
勅　天のとをあくるけしきもしつかにて雲井よりこそ春ゝたちけれ　俊成
同　とふ人もなき宿なれどくる春ゝ八重むくらにもさゝらさりけり　實之
同　命ありてあひ見んことをさためあく思ひし春にありにけるかな　大輔
同　雪きえてうらめつらしき初草のとつかに野へも春めきにけり　式子内親王
同　鶯のなきつるなへにわか宿の垣根の雪ゝむらきえにけり　師俊
月詣　去年といへゝ久しくあれるこゝちしておもへゝ夜半のへたてゝけり　實國
同　今朝見れゝ霞の衣おりかけて玄つゝた山ゝ春ゝきにけり　右大臣
同　雪のうちにいかてをらまし鶯の聲こそ梅のゑるべなりけれ　定家
同　かすが山ふもとの里に雪きえて春を玄らするみねの松風　定家
代　あら玉の年ゝ身にこそとまりけれ立ちかへるとゝ誰かいひけむ　後法性寺入道
同　いつしかと末のまつ山かすめるゝ涙とともにや春のこゆらむ　俊頼

代　朝かすみたてるを見れゝ水の江のよし野の山に春ゝきにけり　鎌倉右大臣
同　見わたせゝひちの高ねに雪きえて若菜つむへく野ゝなりにけり　兼盛
同　こはりゐし水のしら波岩こえて清瀧川に春風そふく　後京極攝政
同　水鳥のうきねの床の春風に氷のまくらとけやしぬらむ　匡房
　　やと毎にいとなみたてし門松のまつにかおらす春ゝきよけり　契沖
　　年たてゝ野へのあろひのゆかしさを今日こむ友にまつやちきらむ　眞淵
　　筑波山去つくのつらゝ今日とけて枯生のすゝき春風そふく　同
　　をつくはもとはつあしはもかすむゑねこし山こし春やたつらむ　同
　　東路ゑ春たちにけりから舟の對島の浪ものとけからまし　同
　　のとけさは袖にしられてから衣きのふにも似ぬとるのはつ風　宣長
　　さし出るこの日のもとのひかりよりこまもろこしも春や去るらむ　同
　　吹く風もなこの浦松はの〳〵とかすむ梢に春ゝきよけり　同
　　春はまたあさかの浦もかすまねと色こそまされすみよしの松　枝直
　　二見かたこちふく風にあけそめて神世のまゝの春はきにけり　千蔭
　　いなむしろ河そひ柳うちなひきこはり流れて春ゝきにけり　同
　　わかの浦やのこれる雪もあしたつもほのかに見えてかすむ春かな　同
　　つくはねの高ねのみ雪かすみつゝすみた川原に春たちにけり　春海
　　こはりゐしかけひのつらゝうちとけて去つくの田ゐに春たちにけり　同
　　朝日子のひかりまちとる若水にくまはや千代の春のこゝろを　同
　　あけぬとて名のるからすの聲のうちに山きはかすみ春ゝきにけり　たみ子
　　あらたまる春のけしきのいかなれはかとらぬ松の色に見ゆらん　景樹
　　年たちてはしめてあくる天の戸を出る日影も神代ありけり　同
　　あら玉の年たつ今日は心さへ身さへきのふのものとしもなし　知紀
　　まこも草もえ出る春になりにけり淀の澤水うちけふりつゝ　同
　　うちはらふ竹のあみ戸のちりはかり霞める山はいつこなるらむ　諸平
　　ともゐくもたとらてたゝに嬉しきゝ春くる今朝のこゝろ也けり　大平
　　ものことに今朝しも春と見ゆるかな心やまつはあらたまるらむ　成章

## ○若菜（わかな）

初春の頃、水邊また野邊などに出て、若菜を摘みて、若きを祝ふ心より、老も若

かへるこゝろにも、詠むこ。古は正月七日にい、七種の若菜をつみて、羹にとゝのへて、食すれば、万病を養ひ、邪氣を除くなどいへり、支那の故事によりて、摘菜の事、尤盛に行はれしものなり。

春　菜　誰かための若菜　すゝしろ　山田の根せり

若菜つむ　老せぬわかな　せり　下もえわたる

菜つみにと　野へのわかぎ　せり　ふ　老もわか菜

濱　菜　澤邊のわかな　わかめつむ　みどりにもゆる

磯　菜　いはふわかな　せえいつる　まだらわかき

雪わけて　雪まのわかな　は、こ草　こはる下根

はたけせり　裾野のわかな　生ひそむる　よものさと人

深せり　若菜つむ野に　をはきつむ　をとめが友や

ゑぐつむ　澤田のわかな　みるめかる　つめるさと人

袖さむみ　打むれてつむ　たけぬまに　日かすにつめと

野守　たかためにつむ　君とわれ　一人いつまぬ

二葉ある　君よ見せんと　花かたみ　もすそぬらして

さと人　れなし心に　籠（カゴ）も　家つとにとて

をとめ子　春の日つめど　たつねきて　雪ま待ちえて

つむ人の　神に手向る　ふりとへて　雪ままもまたで

野へにきて　むかしかたみに　あくかるゝ　雪まをわくる

野つかさ　あとをたつねて　れりたちて　君かためとて

うら若き　袖にあまりて　雪きえて　霞しく野のへ

賤の女が　こゝろを野へに　野をやく　玄めおきし野べ

を　の　べ　都ゝ野への　わすれ水　萬代しめて

玄けき恵み　春の恵に　澤水に　衣手さえて

つきせぬ　また深からぬ　もろともに　もゆる春野に

玄めし野　よひの小雨に　いとはやも　草ふみしたき

朝雨に　かすみのころも　打つれて　沫雪そふる

はとけの坐　小田の小せり　つみはやす　後（カシロ）めたさに

雪ませに　千とせをかけて　われつまん　聲にひかれて

袖あへて　行かへりして　鶴のゐる　よもひを野へに

春いまづ　つむ手に千代の　我そのゝ　春のならひと
つみたむる　雪まも青く　いつかたに　野守を友と
おもふとち　袖うちぬらし　つみのこす　いく日とまちし
いてやけふ　朝露はらひ　あせつたひ　衣手ぬれて
日かけさす　先とけそめて　片岡の　ぬれてもつまん
ぬれ〳〵て　今やつまゝし　雪の古道、　若菜つみてん
ふる雨に　萠えまさるらし　雪ふかく　つむ手も寒き

## ●名所

忍岡 武蔵　根岸の里 同　向島 同　淺澤小野 摂津　難波江 同
白川 山城　芹川 同　鳥羽田 同　竹田 同　布留の中道 大和
飛火野 同

○

古　君かため春の野に出てゝ若菜つむわか衣手に雪ゝふりつゝ　仁和帝
同　み山には松の雪たにきえぬくに都は野への若菜つみけり　讀人不知
同　春日野に若菜つみつゝ萬代をいはふ心は神そしるらむ　素性

野へ見れはわか菜みつけりうべしこそ垣ねの草も春めきにけれ　貫之
同　つみたむることのかたきは鶯の聲する野へのわかななりけり　圓融院
同　春日野におはくの年はつみつれと老せぬものは若菜なりけり　圓融院
後拾　春野は雪のみつむと見しかともおひ出るものゝ若菜なりけり　和泉式部
新古　今日とてや磯おつむらむいせ島や一志の浦のあまのをとめ子　俊成
代　里人もヨか菜つむらし朝日さす御垣の野へは春めきにけり　爲家
同　いざや子等雪きえぬらし足引の山澤ゑぐも摘てかへらむ　定嗣
同　春くれは千代のふる道ふみわけて誰せり川に若菜つむらむ　家隆
ふめはきえきゆれはつみて春の野の雪も若菜ものこらさりけり　契冲
たつのすむ野澤のねせり今日つみて祝ふ千歳ゝをるくもあるかな　同
つめはかつ千代のためしのうれしさも袂にあまるわか菜なりけり　春海
筑波ねの雪けにぬるゝをとめ子かすそはの田居に若菜つまはや　千蔭
あしたつの雪ふみわけしあととめて千代のわか菜を今日やつまましし　同
春日野の若菜をつめはわれなからむかしの人のこゝちこそすれ　景樹
つめとなほつきせぬものは野へにおふる若菜と君かよはひありけり　筑波子

みかりせし野澤にいてゝはし鷹のすゝなつみつゝ今日もくらしつ　枝直

春毎に若菜つみにとおれくれは野守もわれをとかめさりけり　濱臣

## ○霞（かすみ）

古來霞といふ題にハ、專ら初春の心をよむへしといへれと、必すしも、泥むべからす、總て春立て、四方の景色の、何となく打かすむさまより、博くよむべきあり。

淺みどり　かすめるそらの　うすくこく　霞のまかき
草も木も　かすみうきたつ　山のとも　霞わたれり
空の色ハ　かすみにはへり　あけぬるか　霞のそこや
いく千里　のすみたゐ引　あともなく　霞のうち
見わたせハ　かすみのこれる　みえわかて　霞そふかき
そめてけり　かすみきらへり　うつもれて　霞のみたれ
たちこむる　かすみそふかき　たえ〳〵に　霞のよそよ
春の色に　霞に曇り　立そひて　霞をわくる
野も山も　かすみのころも　はの〳〵と　霞をつたふ
朝くもり　かすみの袂　はのめきて　霞にけりな
霞ませて　かすみにまよふ　雲井より　霞にとさす
霞む夜の　かすみにひたす　春かすみ　霞むともあし
朝かすみ　かすめハ遠し　夕かそみ　一重かすみて
むら霞み　横きるかすみ　八重かすみ　つゝむかをみに
一いろに　ゐひくかすみ　薄かそみ　朝日もかすむ
打かすむ　見る〳〵かすむ　打なひく　月かけも霞む
へだてきて　臘にかすむ　立わたる　あとよりかすむ
立まよふ　立なかくしそ　とるかゐる　みとりのいろに
かきりなく　行へも去らす　ふかくなる　思ひわたれる
かほつかな　けふりもまかふ　立そむる　おほひわたれる
天きらひ　遠きなかめ　風たえて　雪よりうへに
春淺み　風にみたるゝ　夕くもり　波路の末も
をちかたの　松よりふくハ　曉ふかく　花のおもかけ
峯つゝき　夕月ながら　夜をこめて　汐路はるかに

朝ぼらけ　めなれし山も　うら〳〵と　遠山もとに　作者不知
峯いくへ　花まつまての　のどかなる　なかめ馴れたる　家持
山かくす　入日かすみて　ゆくかたに　軒よりかすむ　重之
かすみあふ　日かけに霞む　みねのわたりに　日を經てかすむ　能宣
かすみゆく　かすみがくれ　波の音も　行手かすめる　俊頼
夕なきに　霞にきゆる　梶の音も　月に棚ひく
打わたす　いや遠さかる　うすくこく　松風かすむ
くれあゐに　光をさふる　そこいかとあく　鳥の音も霞む
聲いして　波まも見えす

○

万　かきろひの夕さりくれいさつ人のゆづきかたけに霞たなひく
同　子等か手を卷向山に春されい木の葉しぬきて霞たなひく
拾　よし野山みねのしら雪いつきえて今朝いかすみのたちかいるらむ
同　田子の浦にかすみのふかく見ゆるかなもしほのけふり立そいるらむ
千　けふりかと室のやしまを見しほとにやかても空のかすみぬるかな

同　見わたせいそことしるしの杉もあしかすみのうちや三輪の山本　隆房
同　なかめやるかすみのうちに昔見し野寺の鐘の聲ひゝくあり　敦中
新古　朝かすみ深く見ゆるや烟たつ室のやしまのわたりなるらむ　清輔
同　見わたせいかすみのうちもかすみけり烟たあひくしやかまの浦　家隆
勅　三冬つき春しきぬれい青柳のかつらき山にかすみたあひく　鎌倉右大臣
同　久方の雲井に見えし伊駒山春いかすみのふもとなりけり　後京極攝政
同　あとたえて今いなからの橋あれと春のかすみい立わたりけり　經盛
同　朝戸あけてふし見の里になかむれい霞にむせふ宇治の川波　俊成
月　朝またきかもの川せを見たせいかすみの底にうつもれにけり　頼輔
代　今朝見れい空のけしきのしるきかな霞や春の姿なるならむ　師俊
同　かつらきや高まの山の朝かすみ春とともにもたちにける哉　匡房
同　おふの浦の霞をわたる蜑小舟いつれの浦の玉藻かるらむ　秀能
六帖　こゝにして春日の山を見わたせい小松か枝にかすみたなひく　讀人不知
　もしほやく難波の浦の八重かすみ一重いあまのしわさなりけり　契沖
　住よしの松そかすみにあらいるゝ遠里小野の草のはつかに　仝

むらさきのめもえる〳〵といつる日にかすみ色こきむさし野の原　眞淵
立あらふ高ねのひとちかけくれて霞にのこるゆふつくひかな　春海
みよし野のゆきのふるさと春くれゐ青根かたけそまつかすみける　仝
深みとりかすみの底にはの見えてそれとい去るしから崎の松　千蔭
ひとすちのかすみのうちや久世桂梅津大井のあたりなるらむ　蘆庵
春の日にゐな野をゆけゐ有馬山ありとも見えすたつかそみかあ　宣長
こき出て丶明石のとより見わたせいやまとしまねもかそむ春かな　仝
むさし野をふりさけ見れゐ秩父ねに春日かけろひかすみたあひく　枝直
旅人のやとりやいそく呉竹のふし見のさとをかすみこめけり　春満
さとなれてあく鶯の聲のみいたちもへたてぬとるかすみかな　古道
よひの雨に岡へのみゆき消てゝあしたのとけくかすむ野へかな　濱臣
久かたの天にみちたるうれしさい春のあしたのかすみなりけり　有功
花をまつ心とともに嵯峨山のこすゑにかゝるとるかすみかな　忠秋

## 鶯　うぐひす

○

谷の古巣を出て丶、春を知らせ、籬の竹に移り、梅にねぐらを去むるなど、さま〳〵あるべし。

うくひすの　梢にうつる　雪のふるすに
わかやとの　なくにつけても　谷ふかき　古巣をいて丶
梅にきて　誰かはつけし　きくたひに　鳴つる聲に
花さかぬ　梅の小枝に　きく人も　竹のさ枝に
きけゐまつ　鳴聲きけは　れのかねに　きゐる鶯
うちはふき　花になれ行く　くれ竹に　木つたふ枝に
軒ちかく　よはにやきつる　閨ちかき　ねくら定めよ
聲すなり　花まつほとの　さそはれて　消あへぬ雪に
春さむみ　柳のうれに　いてかてに　聲さとなる丶
すみかへて　春しりそむる　ふるすより　風のたよりに
春の日に　花をもさそへ　まつほとに　雪ふみちらす
朝あゝ　春の里とふ　きこゆなり　香をやとめてし
聲きけゐ　聲ほのかにも　朝夕に　初音あるらん

移り行く　朝けの窓に　鳴聲に　朝戸なあけそ
この春も　おのか羽風　里あるゝ　契わすれす
去ゝなく　聲そ春ある　人さそふ　初音ならはし
籠のうち　人來となく　雪になく　こはるなみだ
聲のいろ　梅の花かさ　うらわかき　花になくこゑ
來なく　ふりいて、鳴く　今朝きなく　なれてそきなく
鳴しあれて　鳴てやすらふ　さへつる　千代のはつね
なき出て、　聲さへさむく　朝戸出に　さへつりかはす
花ぞの　身にしむ聲　うひ〳〵し　日影と共に
朝けの窓　時もとむる　春まちつけて　春をあらそふ
ふり出て、鳴　ゝや來なけ　ひとり春し　あくかれ出る
南にうつる　匂ひ出たる　ふるすうかれて　もゝさへつり
身にしむ聲　聲さへ靡く　身をうくひす　はつかなる聲
春を伴ふ　聲ならはしに　春を知らせて　春つげろむる
春待つけて　れのれ時しる　香をたつねきて　さひしさを問ふ
またるゝものゝ　きゝならしても　聞すてかれき　けさきけば
はのかにきこゆ　梅かゝさそふ　竹のしげみに　窓のくれ竹
朝いせられす　竹のあみ戸　あくるまかき

## ●名所

小倉山　山城　伏見の里　同　深草の里　同　音羽川　同　春日野　大和
吉野　同　根岸（初音の里　武蔵ともいふ）

○

万　冬こもり春さりくらし足引の山にも野にもうくひすの鳴　讀人不知
同　梅の花さける岡べにわれをれゝともしくもあらす鶯の聲　讀人不知
古　春きぬと人はいへとも鶯の鳴かぬかきりゝあらしとそおもふ　忠岑
同　春たてゝ花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく　素性
同　野へちかく家居しをれゝ鶯のなくなる聲ゝ朝あ〳〵きく　讀人不知
拾　あら玉の年たちかへるあしたよりまたるゝものゝ鶯の聲　素性
後拾　ふりつもる雪きえかたき山さとに春を去らもる鶯の聲　讀人不知
同　谷ふかみ人もかよはぬ山さとゝ鶯のみや春をつくらむ　資盛

同　年をへてきけともあかすわかやとの花に木つたふ鶯の聲　政長
新古　かすみたつ春の山べに櫻はああかそちるとや鶯のなく　讀人不知
うちわたす竹田の原の雪のうちに鶯あきぬはるのはつ聲　眞淵
ひまもなきみとりの竹の葉かくれになくねも去けき春の鶯　宣長
世の中のうきもつらきも鶯の聲をしきけいわすられにけり　筑波子
雨はるゝゆふくれ竹のおくしめて去めやかにおくうくひすの聲　春海
世の人い春のすさひやおほからむわれとかたらへ軒のうくひす　同
をりかこふまかきの竹のよをこめてねくらなからにうくひすの鳴　千蔭
人とはぬ竹の中道なかくにまつうくひすのはつ音きゝけり　同
のき近き一むら竹よふしなれて朝ことにおくうくひその聲　枝直

## ○春雪　はるのゆき

春の來りても、猶ふる雪をいふ、消え易き意などにてよむべし。殘雪といふに、かゝはして詠みても、よろし。

今もなほ　あわ雪そふる　花さかぬ　かつふる雪

消えやすき　春のあわ雪　花あらて　あまきる雪
つもりにし　水のあわ雪　春去らぬ　おのかふゝき
あさ日さす　雪の朝かせ　山かけや　ふりていこほる
かきくらし　春の山かせ　草の上に　かすみてふる
ちりまかふ　雪のむらきえ　のこりけり　ふるほとはかり
さゆる日に　よもの山邊に　いつまてか　枝にたまらぬ
春きても　春ともいはす　消えかたき　枝れもからぬ
けぬか上に　猶そらさむく　山ふかみ　きゆるをいそく
あわ雪の　ふれとつもらぬ　や丶消えて　とくるもろし
ふりそへて　また雪ふかき　花と見て　空かきくらし
かすめとも　春を去らせぬ　春さえて　さえかへる嵐
春またわさみ　木ことの花　霞たちこめ　若菜つむ野に
はかなく見えて　春をうつめて　春をかすめて　かすむ空より
花にまかひて　春もしもおし　鳴うくひすの　聲もさむけに
朝日さす岡へ　遠山のはに　竹の下折れ

○

万　あすよりん若菜つまんと玄めし野よきのふも今日も雪ゝふりつゝ　赤人
古　春かすみたてるやいつこみ吉野のよし野の山に雪ゝふりつゝ　讀人不知
同　こゝろざしふかくそめてしをりけれゝきえあへぬ雪の花と見ゆらむ　讀人不知
拾　春たちてあしたの原の雪みれゝまたふる年の心ちこそすれ　祐舉
後拾　花おくてをらまはしきゝ難波江のあしの若葉にふれる白雪　範永
千　道たゆといとひしものを山里にきゆるはをしきこその雪かな　匡房
新古　春きてゝ花とも見よとかた岡の松の上葉にあわ雪そふる　仲實
同　春日野の下もえわたる草の上につれなく見ゆるはるのあわ雪　國信
代　打きらしあは風さむし石上ふるの山へのはるのあわ雪　入道攝政
同　白たへの袖にそまかふ都人わか菜つむ野のはるのあわ雪　後鳥羽院
めつらしと見そめしほとになりにけり遠山のはにのこる白雪　具淵
見るかうちにはかなくきゆるあわ雪ゝもゆる春野にふれば也けり　春海
春ゝまたあさの丶雪のむらきえにあさるきゝすのあとも見えけり　千蔭
梅にちり柳か枝にみたれつゝ春こそ雪ゝあはれなりけれ　千蔭
春かすみたなひきそめし高砂の松の上葉にあわ雪そふる　景樹
鶯の聲する竹ゝをらしとて薄くくそかゝる春のあわ雪　長流
わすれてゝ花かとそおもふ山のはに春も日をへてのこる白雪　枝直
里人のわか菜たつぬとふみわけし跡もさたかに殘る白雪　同

○

## 餘寒　のこりのさむさ

春になりても、さえかへりて、寒きよしをいひ、又去年よりも、反てさむさ覺ゆる心をもよむべし。

花もまた　かすみもわへす　袖さゆる　鶯の聲たえて
山かせの　心ゆるひて　春去らぬ　袂にさむき
春きても　はれせぬ雪に　山ふかみ　二たひこほる
風のおとも　春猶さむし　うつみ火　殘るふゝきに
春を淺み　霞もさゆる　あわぞふる　霜夜のそら
そらゝおは　日かけも寒し　雪ちりて　鐘の音もこほる
朝おく　雪ケにくもる　あられふる　日かけこひしき

春なから　あらしの末に　みそれふる　また雪さそふ
はれやらで　山れろしの風　山かげの　もとの雪け
影くもり　風そさむけき　空いまた　春をよそなる
空さえて　冬にもまさる　さゆるらし　また肌さむみ
よな〳〵は　さゆる春風　風さえて　都の春も
またこほる　雪きえやらて　また結ふ　とけし氷も

○

新古今　山ふかみ猶かけさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ　越前
同　空はなは霞みもやらず風さえて雪げにくもる春のよの月　摂政太政
同　よしの山さくらか枝に雪ちりて花れそけなる年にもあるかな　西行
千　山里はこのまの日かげ猶さえて春とも見えぬ庭の霜かな　家隆
代　若菜つむ狩のやけ原なほさえて袖にたまるは春のわか雪　忠良
うくひすのなみたやさらにこほるらむ花みぬ枝にあられちる也　契沖
雪もまたふるから小野のもとかしはもとのさむさよかへる春かな　同
うすくもり雪げにさえて霞よはあらぬおほろの春のよの月　宣長
ともすれは花にまかひてちる雪にうめかゝさむき二月のそら　蘆庵
ふけゆけは猶かけさむしはるの月かすむと見しや雪けなるらむ　同
なとてかく花おそけにも見えぬらむ春ひと月はさてもすきしを　千蔭

○

## 二月

### 梅（うめ）

歳の中より、咲き初ること、また春のあした、諸の花に先ちて匂へること、及ひ霞月雪鶯などに取合せて、さま〳〵によむべし。

我か袖に　風かよひきて　咲つゝく　手枕ちかく
折て見る　にほふあたりの　春の夜ゝ　梅のはつ花
待とはに　さけるさかさる　ぬしをらぬ　梅か香かをる
我宿の　梅のにほひを　我か國の　梅になりゆく
くれなゐよ　ひもとく梅の　誰かためと　梅の夕はえ
春風の　あまた梢の　吹かくる　梅の下かけ
風かよふ　霞のそこも　立よりて　梅見かてら

色そへて　獨さきたつ　里つゝき　梅かえうたふ
うつりかに　きえぬ雪とや　匂ひきて　梅か香ふかき
軒ちかき　たくひいわらじ　咲うむる　梅かをる夜い
咲みちて　かさしの梅の　霞めとも　梅の下道
吹もせで　來ぬ人さそへ　さよ風よ　梅の下風
たつね見ん　こそめの梅の　誰か里に　梅さくころの
香をとめて　八重さく梅の　春いたゝ　梅さく園の
色ことに　梅さく軒の　小籠の外　花い雪かと
下行く水　ささそにはへ　老かくる　かしらにかざす
まどちかく　百木の梅　折かさす　かすむ立枝
關の戸　花の下ふし　雪のちる　はころひそむる
かた枝　朝風かをる　さく梅の　ふるとしかけて
八重咲く　咲るかきはに　袖の香　あちぬにはひ
この花　やみもあやなし　初花　枕にかをる
おそくとく　あるしゆかしみ　ゑみうむる　香をおつかしみ



ほゝゑむ　袖さへかをる　しつえ　花い雪かと
色ふかみ　鶯の宿　雪の古枝　香をしるべにて
まつ人の香　あかぬ色香　香やいかくるゝ　ゆるしの色
色さへ袖に　たくひなき色香　夕くれなゐに　風にあまりて
月も色そふ　うつる朝日　雪もくれなゐ　まかひし雪
鶯の宿り　鶯のねくら　鶯の羽風　鶯さうふしるべ
わぎもこに　盃にうつる　袖よりあまる　人たのめある
いやなつかしき　とめこかし　水にうゑる　かきこしよ咲く
ぬしおき宿　里をあまたに　家つとにせん

同　●名所

龜井戸　武藏　　浦田　同　　小向井　同　　杉田　同　　木下川　同
闇部山　山城　　梅津の里　同　　伏見の里　同　　月が瀬　伊賀　　御垣か原　大和
難波津　攝津　　生田森　同

○

万　去年の春いこじてうゑしわかやとの若木の梅い花さきにけり　廣庭

万　わかせ子に見せんと思ひし梅の花それとも見えぬ雪のふれゝば　赤人
同　春されゝまつさくやどの梅の花ひとり見つゝや春日くらさん　憶良
同　梅の花今さかりなり百どりの聲のこはしき春きたるらし　肥人
古　宿ちかく梅の花うゑしわちきなくまつ人の香にあやまたれけり　讀人不知
同　月夜にゝそれとも見えず梅の花香をたつねてそしるへかりける　躬恒
同　梅の花にほふ春へゝくらふ山やみにこゆれと云るくぞありける　貫之
同　よそにのみあれとそ見し梅の花あかぬ色香ゝをりてなりけり　素性
同　ちりぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時のおもひでにせん　讀人不知
後撰　うめの花よそなから見んわき妹子かとかむばかりの香にもこそしめ　讀人不知
拾　朝まだきおきてそ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに　元良親王
同　梅か枝をかりにきて折る人やあると野邊の霞ゝたちかくすかな　順
同　わか宿の梅のたち枝や見えつらむおもひの外に君かきませる　兼盛
後拾　梅の花かゝかりにほふ春の夜のやみゝ風こそうれしかりけれ　顯綱
同　風ふけゝをちの垣根の梅の花香ゝわかやどのものにそありける　清基
同　末むすふ人の手さへやにほふらむ梅の下ゆく水のなかれゝ　經章

同　梅か香をたよりの風やふきつらむ春めつらしく君かきませる　兼盛
同　わかやどにうゑぬゝかりそ梅の花あるしなりともかゝかりそ見む　嘉言
金　梅かえに風やふくらむ春の夜ゝをちぬ袖さへにほひぬるかな　長房
同　神垣に昔わか見し梅の花ともに老木とありにけるかな　經信
同　昔見しあるしかはにも梅かえの花たにわれに物かたりせよ　基信
詞　吹くれゝ香をなつかしみ梅の花ちらさぬはとの春風もかな　時綱
同　梅の花にほひを道のしるへにてあるしも云ちぬ宿にきにけり　公行
千　今よりゝ梅さく宿ゝまゝろせんまたぬにきます人もありけり　師頼
新古　あるしをゝたれともわかす春ゝたゝ垣ねの梅をたつねてそ見る　敦家
勅　春の月かすめる空の梅か香にちきりもおかぬ人そまたるゝ　具定
月　人ことに袂にしめてかへれともつきぬゝ梅のにほひなりけり　隆寛
同　ぬし云ちぬ香こそ袂にうつりけれ垣ねの梅に風やふくらむ　忠度
代　誰里の梅のたち枝を過きつらむおもひのほかにほふ春風　前太政大臣
同　さりともと人まつ雪のうたゝねにおとろくはかりにほふ梅かな　讀人不知
同　わかやどにさきたる梅を月清みよおゝくきつゝみる人もがな　讀人不知

代　なかむれは見ぬいにしへの春までもおもかけかをる宿の梅か枝　式子内親王
同　あはれにも聞ゆなるかな我やとの梅ちりかたのうくひすの聲　和泉式部
同　梅か香は今朝こそ風よりはひくれきのふは雪にあさむかれけり　契沖
同　春の夜の月はかすみにふけなからねやのひまもる軒の梅か香　同
同　はつせのやさとのうなゐにやとゝへはかすめるうめの立枝をそさす　同
同　梅の花おほろ月夜にはふなり常にもかもあこのころにして　同
同　とふ人の笛もきこえて垣のうちに梅ちる風のおもしろきかな　眞淵
同　舟よする衣手いたくかをるらんさくや梅津の春の川風　春海
同　なつかしき花のゑまひを見し夢のおもかけうかふ梅のした蔭　同
同　春風をひたすら花にうきものと梅か香しらてかこちけるかな　宣長
同　かよひきてわかね覺をやまちつらむ枕にのこる夜半の梅か香　同
同　朝戸出の袖こそにはへ軒はより春やたちえのうめのはつ花　同
同　朝またきたをるたもとに露おちてにはひもぬるゝ梅の木のもと　同
同　梅のをる霞のおくをとめゆけは猶木のもとはるけかりけり　千蔭
同　春風に梅をる夜は人またぬねやの板戸もさゝれさりけり　同
同　片岡の梅のさかりになりしよりあしたの原にはひなりけり　景樹
同　日のめくる南の枝の霜とけにぬれてはゝゑむうめのはつ花　蘆庵
同　さしてゆくかたもなけれと香にめてゝ梅さく野へゝ遠くきにけり　同
同　わか袖に梅か香いたくかをるなりこの夕陰にたちとまれとか　春郷
同　朝かすみたち出て見れは梅さきて在明の月にはる風そふく　枝直
同　青柳のかたよるかたやかをるらむふくとしもなき梅のした風　同
同　風ならてとはれぬねやの手枕にいつこの梅の香かかよふらむ　たみ子

○柳（やなぎ）

緑の色を賞し、或ゝ風に靡くさまなどをよむべし、その外、雨露などにも、よそへてよむことなり。

淺みどり　ゑたり柳の　我か門の　糸そめかくる
くりかへし　露ちる柳　春風も　川そひ柳
白露を　染てみたるゝ　風ふけゝ　春のやとりや
たちよりて　老木の柳　陰ふかき　のとかに靡く

山本の　みどりの眉　舟つなぐ　陰ふむ道
よる人も　風にまかせて　春の色を　露吹みたを
吹たゆむ　眉かきたるゝ　朝　風に　なびくをみれば
長き日も　岸ねの柳　くり出す　風やよるらん
くりかけて　年をへつゝも　かたよりに　もえ出にけり
道のへの　吹くる風に　ふしなひき　風そたえせぬ
涙よれゝ　玉ぬきみたる　ふる　柳　烟とも見ゆ
春くれゝ　枝うちなひく　ふく風の　露の朝かせ
みどりにて　をちの柳の　そめてけり　柳の花
柳かけ　糸ゝふりせぬ　青　柳の　柳のしなひ
玉かつら　玉のを柳　春の柳か　みたれてなびく
さし柳　さらせる原　五ッ本モト柳　手そめのいと
玉柳　手引の糸　門の柳　のとけき風に
露とむる　いと打はへて　かきつの柳　浪もてあらふ
一もと柳　うちたれかみ　新桑眉　川べにたてる
うちけぶる　ねくたれかみ　まつはるゝ　あれしまかきに
まゆこもる　なひくをかた　露の玉ゆら　風による
いとのつらしき　風のけづる　よとむ川せよ　風によらるゝ
末もむすばぬ　浪のあや　田中のみち　涙よる
むすはゝれたる　たをやめの　霞のそで　めつらしき
かたよりしける　をちかたの　とひりの柳　おはしまに
かさしさそ　露むすふ　あらそいぬ　風をすかたに
清水に　波よるきし　池の鏡　糸もてぬける
朝ねかみ　花田のいと

## ●名所

隅田川 武藏　佐保川 大和　布留野 同　猿澤池 同　飛鳥寺 同
六田の淀　鴨川 山城　音羽川 同　桂川 同　宇治川 同
廣澤池 同　住の江 攝津

○

古　淺みどり糸よりかけて春風を玉にもぬける春の柳か　遍昭

後撰　鶯の糸によるてふ玉柳ふきなみたりそとるの山風　讀人不知
金　朝まだき吹きくる風にまかすれゝ片よりしける青柳の糸　公實
詞　いかゐれゝ氷はとくる春風にむすばゝるらむ青柳の糸　季遠
新古　春雨のふりそめしより青柳のいとの緑ぞいろまさりける　躬恒
同　みよし野の大河のべの古柳かけこそ見えぬ春めきにけり　輔仁親王
同　高せさす六田の淀のやゐき原みとりも深くかすむ春かな　公經
同　春風のかすみふきとくたえまよりみたれてゐひく青柳の糸　大輔
勅　淺みどりそめてみたるゝ青柳のいとをは春の風やとくらむ　伊勢
代　さは姫のねみたれ髪の青柳をけつりやすらむ春の山風　匡房
同　のどかなる春のけしきに青柳のゐひくゝ春のしるしなりける　經信
同　青によしならの都の玉柳いろにも出るく春はきにけり　定家
同　たつ田川み室の岸の古柳いかにのこりて春をしるらむ　家長
同　六田川風ものどかにゆく水のみとりによどむやなきかけかな　眞淵
　　そめかくる柳のいとや人心とるよひかるゝとしめなるらむ　千蔭
　　春されゝ六田のよどの柳原みどりに見ゆる風のいろかな　同
　　もるされゝよもきか門のさし柳さしてとひくるひともありけり　同
　　吹くとなき風になびきてくる春ののどけさ見する青柳のいと　宣長
　　よひの雨のなごりかすめる柳原ほのかにみする春のいろかな　春海
　　春雨ゝふるとも見えず柳原あるかゐきかにかけかすみつゝ　同
　　春風のかすみふきとく河つらにとれぬけふりや柳なるらむ　同
　　春くれゝ人そとひけるかくれかのかとの柳のいとしきまて　蘆庵
　　川かせになびくかすみのたえまよりかつ見えそむる岸の青柳　同
　　わかやとの一もと柳いとたれてくるやと人をまたそしもなし　枝直
　　落たきちなかるゝ河しなかりせゝよりて見てまし青やきのいと　公庸
　　もみ田川わたしまつまの手をさひに結ひてとなつ青柳のいと　春門
　　春たにもまた立なれぬ青柳のかけふむ道のめつらしきかな　景樹

○

## 春草　若草　はるくさ　わかくさ

雨に萠え出つることより、冬かれし野の、春になりて、青みわたれることなどよむべし、

日かけさす　うらめづらしき　雪きゆる　むら〳〵見ゆる
白雪の　霜のふる葉も　おしなへて　野もせに生る
春めく　垣ねのあたり　ふる草の　又もえ出る
若草の　染るくさと　春草の　色まさり行
もえにけり　汀の小草　下もえの　むら〳〵青し
春といへは　草のとつかに　おろくとく　春のわか草
もえ初る　垣ねみとりに　下めくむ　雨ふるごとに
淺みとり　きさしそむる　みしかき　古草ましり
雪より後　玄げきめぐみ　野への色　春のひよりに
うすみとり　かれふのすゝき　うちわかみ　野へなつかしく
のびたゝぬ　御代のめくみ　岡の葛原　ふた葉より
いやおひ　けふりみしかき　よひ草　ねよけに見ゆる
おひさき　またくきたゝぬ　空の色に　葛の下もえ
おのがさき〳〵　狹のやけ原　路の芝草　雪間をわくる
枯野の下　おへてみとり　ゆゑしみとりに



## ●名所

飛鳥岡　武蔵　向島　仝　嵯峨野　山城　深草　同　水無瀬川　同
吉野　大和　春日野　同　三笠野　同　ふるの中道　同　老曾の杜　遠江
那古の海　摂津

○

新古　うすくこき野へのみとりの若草にあとまて見ゆる雪のむらきえ　宮内卿
勅　わかやとの垣ねの草の淺みとりふる春雨そ色はそめける　能宣
同　いつしかと今日ふりそむる春雨にいろつきわたる野へのわか草　肥後
同　むさし野の春のけしきもそられけり垣ねにめくむ花のゆかりに　慈圓
代　鶯のなきにし日より山里の雪まの草も春めきにけり　後京極摂政
雪きえぬほとこそあらめ春の色をえやはそのふの岡のわか草　宣長
雪はまたきえもはてぬに野へいはや薄みとりなる春のわか草　蘆庵
朝つく日かけさすかたの雪間よりやゝあをみゆく園のわか草　千蔭
ぬるみゆく水のけふりはすみた川堤のくさのけふるゆりけり　同
きゝすなく野はこゝろせよやかなくに道のをくさも春はもえけり　枝直

秋いまた遠さとをの丶春雨に色つく草そまつみとりなる　長流
朽のこる古葉玄のきて植おきし一むらすゝきくきたちにけり　茂岳

○

## 蕨　早蕨（わらひ）　さわらび

蕨を折るといふことを、時節（チ）にかよはせ、又もえいつることより、火のことによせて、詠みなとそるあり。

山さとは　野へのさわらひ　雨ふれは　春のさわらび
かきわけて　手をりて行ん　山かつの　野へにくらしつ
下わらひ　折もすくさぬ　さわらひの　をり〳〵い
手すさひに　下もえわたる　家つとに　ゆくべき道の
もえいて丶　野への行手に　蕨つむ　花さかぬまの
蕨おふる　谷のさわらび　とつわらび　峯のさわらひ
おひそむる　山ふところ　ゆかりの色　下もえいそく
家つと　おぞろか下　妹とつむ　をり玄る色
もとむる　手ことに折る　折りつくも　松の木蔭に
山つと　苦の上なる　柴人　つま木よそへて
谷かけに　片山かけの　打むれて　岡こしの道
燒野　きゝす鳴野　里人　かたみに入る丶

## ●名所

小野山（山城）　くるすの小野（同）　春日野（同）　飛火野（大和）　片岡山（同）
信夫の岡（陸奥）　しめちか原（下野）

○

早わらひを手ことに折てかへるかなわれこそかねて野へをやきしか　隆信
さわらひもえやゝぬらむ山人の野やくけふりいたなひきにけり　小辨
いさ今日はをきのやけ原かきわけてたをりてもこむ春のさわらひ　眞淵
袖つれてあそふ春野の手すさひにをりあれなる初わらひかな　春海
都人とゝすは春もつれ〳〵とひとりやをらむみねのさわらひ　蘆庵
足引の山さくらとを立出てをかへのわらひ今日はをらまし　古道
きゝそなく岡の小松の下わらひをりのこされて春たけにけり　春門
鶯にさまたけられて今日もまたをかへのわらひをりそのこせる　技直

みよし野のみすゝかもとい風さえてまたもえ出てす春のさわらひ　景樹

○

春曙　はるのあけほの

曙は曉の後あり、夜の明んとして、山に横雲などかゝりて、有明の月も、やう〳〵光を収るころ也、花鳥霞など思ひ合せて、よむべし。

あけわたる　霞もふかき　鐘のおとも　明かたゝるし
霞　たつ　花にあけ行く　ゝらみゆく　かすみに遠き
ゝのゝめの　霞にのこる　明ほのゝ　山本かすむ
ほの〳〵と　曙かすむ　よこ雲　かすみにつゝく
ほのかにて　花のよこ雲　たえ〳〵に　浦の松ゝら
をちこちに　里見えそむる　天つそら　空ののとけさ
はから〳〵と　わきてかすめる　そらの匂ひ　花鳥のいろね
見わたせは　空も一つに　あれもあり　船出する
あかむれゝ　花よりしらむ　遠かたに　山の端見ゆる
たかならはしの　秋よりまさる　うつしゑ　うとましからぬ
ひとつに霞む　あり明の空　明かたちかし　山きはかけて
をちの山のは　山もかすみて　月のなこり　霞にうとき
花鳥の宿の曙

○

新古　霞たつ末の松山ほの〳〵と涙にはなるゝ横くものそら　家隆
同　春のよの夢のうき橋とたえしてみぬにわかるゝ横雲の空　定家
勅　山の端も空もひとつに見ゆるかなこれやかすめる春のあけぼの　師光
同　名もゝるし峰の嵐も雪とふる山さくら戸の曙のそら　定家
同　月かけの梢に殘る山のはに花もかをめるゝるのあけはの　六條入道
同　住よしの松のあらしもかすむなり遠さと小野の春の曙　兌延
おのつからよのまの花の露落て玄ゝふよかをる春のあけはの　千蔭
下にこる刀ねの川とのあけはのはかすめる空のうつるなりけり　同
よこ雲のうす紫にわかるゝやすみれさく野のゝのゝめの空　同
難波かたかすむ入江のみをつくしたてるやいつこゝるのあけはの　技直
ゝらみゆくをのへの櫻いろみえてかた山くらき春のあけはの　春海

ちりつもる花にやまたきしらむらむいちいぬ庭の春のあけはの　春海
青柳の下かけかすむ六田川月もよとめるいるのあけはの　同
去つかゐる月にと向ふあけはのゝ心もしらぬ百ちどりかな　景樹
あけはのゝわか山さくら立いなれ松にかゝれるいるかすみかな　廣海
わすれめやかたのゝ花もかつ見ゆる淀のわたりの春のあけはの　有功

## 春月（はるのつき）

おぼろに、霞むよしより、花ゐとに、おもひよせて、よむべし、或い、秋の月よりも、あれゐる心なとに、よむもあり。

おぼろなる　かすみのまより　かすむ夜の　ふけゆく空
むら雲を　あはれをそへて　おかめても　そこともわかぬ
くもる夜い　春もおぼろの　いついあれと　むかし戀しき
霞しく　かすみの袖に　臘月夜　もりてぞ匂ふ
をしめとも　むかしに似たる　よはの月　はのかに見せて
花にてる　春の月かけ　春のよの　猶かすみつゝ
ゆく月と　あやゐく霞む　影ふけて　面影みゆる
見るまゝに　おぼろけならぬ　出なから　にはふ月かけ
かそめとも　霞むにつけて　うそけれは　春の一時
はのかにて　花にかすめる　てりもせす　花にうつろふ
霞を出る　霞むならひ　木のまもる　春のならひ
かけ寒し　花しく庭　春やむかし　霞の袖
影はのかなる　けふりの外に　さたかに見えぬ　梅さくやと
春の時しる　老のなみた　霞めはれぬ　軒いよかすむ

○

新古今　淺みどり花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春のよの月　孝標女
勅　大かたのかすみに月そくもるらむ物おもふころのおかめならねと　小宰相
同　梅か香も身にしむころい昔にて人こそあらね春のよの月　俊成
同　難波かたかそまぬ波もかすみけりうつるもくもるおぼろ月夜に　具親
代　さひしさを何にたとへてなかめましかすみて殘る有明の月　隆房
同　くもりなく見るたよあかぬ月かけのおぼろなるまてかすむ空かな　祺子内親王
天の川雪けの水もにこらしをいかておぼろに月の見ゆらむ　契冲

夕ひとり芝生におちて聲やめは山よりのぼる春の夜の月　契冲
かすむ夜はゐしまか磯の涙のうへにうつすともなき月のかけ哉　同
さしくたす舟い波路にあとたえて水上かすむ春のよの月　春海
住の江やゆそえの涙のかすむ夜はあるかなきかよ月そやとれる　同
ふるさとの去かの花園あれにけり月や昔の春をしるらむ　同
草まくらみやこおもへはそれやらぬ心に似たる春のよの月　技直
あらし山花よりおくに月いりてとあせの水にかのみのこれり　千蔭
見しよにはにるへくもあらぬ春なから月のあとれそかとらさりける　たみ子
なか〳〵に雲はたえまもまたれけりかすみとてたる春のよの月　景樹
世の中の春にはもれし山さとの月のひかりもかすむころかあ　同
夕まりの音も音せずなりにけり柳にかすむとるのよの月　有功

## ○春雨　はるのあめ　はるさめ

春の長き日に、去めやかに、降りて、物靜に、さひしきこゝろをよむべし。花をふもひ、若草をおもふとにも、わたりてよし。

ふるなへに　木のめ春雨　花ぐもり　くる人もなく
さひしさは　あまねくめくむ　春の色を　はれぬあかめに
くもりても　催す雨の　晴やらぬ　ふりそめしより
かきくれて　軒のしつくは　ふりぬれい　音なき雨の
音もせて　柳あひきて　目に見えて　山のみとりも
雨そゝく　枯野の草も　春雨に　雫さひしき
つく〳〵と　心はそきい　槇の戸に　我身ふりぬる
見えわかて　雫落そふ　くるゝ空より　檜原もくもる
靜あるる　ぬれても行ん　色そひぬ　花そまたるゝ
さらてしも　淺みとりなる　のとかにて　雨そはれせぬ
おしてふる　春のむら雨　ふりくらす　雨打けふる
けふいく日　そぼふりくらす　花の雫　時しる雨
櫻ちる　霞よりふる　春のめくみ　音をも去のぶ
をやみあく　けふり去めりて　心してふれ　去のふの露
風たえて　こち吹はるゝ　こさめふる　もるとしもあく

くもりふさかり　音静かなる　草のかれふ　梢かけそふ　高遠
花の下露　櫻波よる　峯のかけ橋　ふるやの軒　攝政
苗代小田　わきてさひし　去のふに傳ふ　色つく野へ　行慶
くるゝもわかぬ　御代の恵の　音きくよりも　人そ待るゝ　高遠
山のは消る　戀を催す　梅の花笠　なかめの雨　長方

○

古　わかせ子か衣ゝる雨ふることに野へのみとりそ色まさりける　高遠
新古　ときゝなる山の岩ねにむす苔のうめぬみとりに春雨そふる　攝政
同　つく〳〵と春のなかめのさひしきゝしのふにつたふ軒の玉水　行慶
代　春雨のふりそめぬれゝ松山のもとの緑もいろまさりけり　高遠
同　日よそへてみとりそまさる春雨のふるから小野の道の芝草　長方
かのをかのをかやかりふく軒ゝにいとゝおとなき春の雨かな　千蔭
すみた川簑きてくたす筏士にかすむあしたの雨をこそしれ　同
八重かすみかそみなからにうちしめり野つらのいはに春雨そふる　同
ふるとしもしらてねし夜の春雨をあけて見るこそのとけかりけれ　蘆庵
夕つゝのひかりをかくす霞よりやかてをさゝに春雨そふる　枝直
をり〳〵ゝとゝれまほしき宿なるをおとたにたてよ軒の春雨　春海
春雨ゝふるとも見えそ谷かけゝ木々のしつくの音はかりして　春満
去めやかに花のところをさためけり春の雨夜のものかたりして　春門
妹と出てわかあつみにし岡さきの根垣こひしき春雨そふる　景樹
朝こちのふきもつよらぬ朝はらけねふれる花に雨をこそしれ　久胤

## 春風　はるかせ　はるのかせ

雪氷を吹とくことより、花の香を誘ひ、柳の霞を拂ふなど、惣て春の物によせてよむべし。

玉すたれ　にほふ霞の　吹ぬるむ　花の香おくる
まふ蝶の　かすみをわたる　春風の　袖さむからぬ
吹とゝなき　野への春風　氷吹とく　花やさくらん
柳ゝひかし　花吹ちらす　ぬるむ雫　濡さそふ
霞をこえて　柳をなれず　梅かゝさそふ　春のあさ風

霞吹とく　おびくばかり

○

後拾　淺みとりみたれておひく青柳の色にそ春の風も見えける　元眞
新古　さくら花夢かうつゝか白雲のたえてつれなき春の山風　家隆
同　ちる花のわすれかたみの峰の雲そをたにのこせ春の山風　良平
續詞　梅かえの花ふきかくる春風はいとひおからもなつかしき哉　祐盛
代　花さかりとひくる人の去るへしてあるしかはある春の山風　良圓
つくは山雪のつらゝ今日とけて枯生のすゝき春風そふく　眞淵
百敷の大宮人のをりかさすやなきか枝に春風そふく　春郷
あを柳のかつらき山のあさみとり霞もなひくみねの春風　宣長
夜もすからねやの板戸のひまとめてかをるやそのゝ梅の下風　千蔭

○

春望　春眺望　はるのながめ

春日のうらゝかに、霞む日、打眺めたるけしきを、よむなり。

見えわかて　おかめおれたる　見わたせば　見るめも遠く
うちわたせ　春のけしき　遠の山里　うちわたそ　春のけしき
めもはるに　ほのかにありて　のとかなる　もろこしまでも
夕日さす　八十島かけて　ひとり鳴　霞のをち
夕月夜　八重かすみ　霞のうへ　八重の汐路
大わたの　浦よりをち　花鳥の　春のをちせ
霞の色　沖つしま山　八重山　もゝつ山より
いひをちず　遠山かすむ　山高み　五百重山
野つかさ　霞む川戸　朝あけ　冲の見るめ
うちわたす　かきりなきまて　霞み行く　はとかさかりて
柳原　春の夕くれ　遠方の　畑もかすむ

○

古　見わたせは柳さくらをこきまぜて都ろ春のにしきなりける　素性
後　すか原や伏見のくれに見わたせはかすみにまかふを泊瀬の山　讀人不知
後拾　山高み都の春を見わたせはたゝ一村のかすみなりけり　正言
千　霞しく春の汐路を見わたせは緑をわくる冲つしら波　攝政

同　難波かた汐路とるかに見わたせは霞にうかふ沖のつり舟　圓玄
新古　みしまえや霜もまたひぬあしの葉に角くむほとの春風そふく　通光
同　夕つくよ汐みちくらし難波江のあしの若葉をこゆるしら波　秀能
勅　霞しく松浦の沖にこき出てゝもろこしまての春を見るかな　慈圓
同　いかばかり花さきぬらむよしの山霞にあまるみねのしら雲　寂蓮
代　あふ坂の山越えとてゝなかむれは霞につゝく志かのうら波　後京極
同　藤代のみさかをこえて見わたせは霞もやらぬ吹上の濱　行意
ひとりあかる春の朝けに見わたせはうちの園原霞たなひく　眞淵
みわたせは天の香具山うねひ山あらそひたてる春かすみかな　同
花のいろは霞のうちにあは見えて松よりくるゝ春の山もと　春海
みあせ川せゝの白波くれそめてともし火かすむ山もとのさと　春門
天つそらかすめる月にふしのねの雪より上のとるを見るかな　尊孫

## ○歸雁　かへるかり

雁は秋の中比來りて、春の中に、北國の方へ、飯るものなれは、越路へかへる、常世へ行くなと、よむ也、或は花を見すてゝ行くとも、玉つさをかけて行くなとも、よむなり。

春かすみ　雲井とるかに　かへるかり　ひとつに見ゆる
とゝまらぬ　行へも志らそ　なかむれは　つとさ志くれて
まて志はし　かへるあらひと　春雨に　道もやまよふ
かへるさの　なく〳〵かへる　かりかねの　かへるつとさに
いつくとも　おのかこしちの　あきかはす　聞こそわかね
天つかり　霞をわけて　かへるとも　こしちの雁は
いくつらも　心とゝめよ　雪わけて　志はしやすらへ
ことゝいん　聲をしるへに　おもひいてゝ　花のさかりを
ゆく雁ゝ　かすめる空に　春をうしと　折もわそれす
今ゝとて　かすむ雲ゐよ　うき雲に　つとさにかゝる
志のゝめに　こゝろをいそく　春ことに　くるゝ夕に
春の雁　とね打かはし　あけはのよ　秋まちとはに
夕くれの　かすみわけつゝ　いそくなり　かすむ夕の

この朝け　かへりそめてん　霞む日に　きゆる雁かね
いつしかと　花のえら雲　霞しく　立かへるらん
聲たてゝ　雁のわかれ路　つれて行く　聲はかりして
とこよへと　薄墨いろ　なか旅　花を見すつる
心なく　歸る雲路　うき雲　波路を分る
又來ん秋　くる春とに　天つそら　霞のころも
玉つさ　月をのこして　一つら　鴈の羽風
いくつら　鴈のもろ聲　曉またて　月になく〳〵
鴈の行手　立のいそき　つとめくる時　かすあられゝ
聲吹おくる春風　松風に聲かよふ　あひもおもはで　夜ふかく鴈の
沖めかりかね　雲の衣　中やどりせよ　見おくる月
さ夜や更ぬる　有明かたに

○

古今　春かすみたつを見すてゝゆく雁の花おき里にそみやならへる　伊勢
後　かへるかり雲路にまとふ聲すなりかすみふきとけ春の山風　讀人不知

拾　見れとあかぬ花のさかりにかへる雁猶ふるさとの春や戀しき　讀人不知
後拾　うす墨にかく玉つさと見ゆるかおかそみの空にかへる雁かね　國基
金　聲せすはいかて知らまし春かすみへたつる空にかへる雁かね　成通
詞　中々にちるを見しとや思ふらむ花のさかりにかへるかりかね　忠季
新古　ふるさとにかへる雁かねさ夜ふけて雪路にまよふ聲きこゆ也　讀人不知
同　霜まよふ空にしをれし雁かねのかへるつはさに春雨そふる　定家
月　雁かねの聲するかたをなかむれは霞の中にとはさかるなり　隆信
代　ゆく空もなく〳〵かへる雁かねゝ花のみやこやたちうかるらむ　式部
同　ふるさとゝあはれいつくをさためてか秋こしかりの今日かへるらむ　經信
聲はして空ゆくかりのつら〳〵に見れともみえすかすむ夕くれ　契沖
あしの葉のわかれもゆくかかりかねの難波ほり江のまた夜ふかきに　同
春くれはかそみを見てやかりかねのわれもと空に思ひたつらむ　宣長
かちの音にかよへる聲いさたかにて霞のみをにきゆるかりかね　千蔭
ゆくかりのかけたに玄はし見るへきをうたてもかそむよはの月かな　同
かすむ夜の月もいりにしまくらかのこかのわたりをかへるかりかね　同

花にうき心を人にみせしとやかすみかくれにかりのゆくらむ　春海
かすむ夜の月な見すてそかへるかり花にはうときならひなりとも　同
春の夜のゆめの枕をとひすてゝやとのうつゝにかへるかりかね　蘆庵
さくらさく礒山かけに舟はてゝ夜ふかく雁のこゑをきくかな　自寛
草枕旅をつねなるかりすらもかへる空には音をそなくなる　景樹
花をこそまちわたりつれ雁かねのかへる空にもなりにけるかな　同
末遠くみはてむものを山のはになこりかすめる雁の聲かな　政直

○

## 呼子鳥　よぶことり

この鳥ハ、人をよぶやうに、鳴くより、名を負しものなれハ、その心かまへにて、よむへし。

ひとりなく　夕くれの聲　こたへせぬ　かすむゆふくれ
山ひこ　有明のうら　山中　人よふことり
花に鳴く　君よひかへせ　たれさそふ　たつきもしらぬ
春山　道ふみまよふ　あハれなり　くる人もなき
花のよすか　來なきわたる　おぼつかなくも　心ほそくも

## ●名所

佐保山　大和　奈良山　同　象の中山　同　習志の岡　同　吉野山　同

○

万　神なびの岩せの森の呼子鳥いたくななきそ我戀まさる　鏡王母
同　我せこをなこせの山の呼子鳥君よひかへせよのふけぬとに　讀人不知
古　遠近のたつきも去らぬ山中におほつかなくも呼子とりかな　讀人不知
後　わかやとの花になゝきそ呼子鳥よふかひありて君もこなくに　列樹
詞　こぬ人を待かね山の呼子鳥おなし心にあハれとそきく　宮ひこ
金　いとか山くる人もなき夕くれにこゝろほそくもよふ子とりかな　尾張
千　思ふことちえにや去けきよふ子鳥去のたの森のかたに鳴也　匡房
代　よふ子とり春のむなしく過ゆけハ心ぼそなる音をも鳴かな　讀人不知
山彦のこたふる聲にしられけり三谷のそこになくよふ子鳥　春海
はるゝなる深山の杣の斧の音にこたへてもなくよふ子鳥哉　春満
花ちらふかた山はやし今さらにかひなきねにもよふ子鳥かな　千陰

よふこ鳥われかとゆかん道もなし春もみ山いきりふかくして　長流
とめくれいあらぬかたにもよふこ鳥なか〳〵われにおくれたりけり　廣海

○

## ○三月

### 春駒　はるこま

春草の、もえ出るころに、駒を野山に放ち、飼ふことあるが本にて、春に、駒のうかるゝさまなどを、よむべし。

ふみたつる　澤邊の草を　とりつなく　ところもさらず
春の野の　あれのみまさる　手になるゝ　人もつなかぬ
春こまい　草とむ駒　はみやよき　あさる春こま
あさりして　所えかほに　春の馬　駒そいはゆる
なかき日　霞の中よ　わかこま　ふみしたくなり
あらこま　風にいはゆる　たなれの駒　友よふ駒
いとゆふ　おきたちて　めくる　おのかかけにも
あさりゆく　若草におづむ　霞かくれ　澤べにあさる
いとゆふ　尾花あしけ　野かひ　霞にむせふ

### ●名所

淀野　山城　美豆の御牧　同　いれ野　大和　みかきの原　同
穂坂の牧　甲斐　望月の牧　信濃　小野の牧　常陸　荒野の牧　陸奥
交野の牧　河内　難波江　摂津　三島江　同

○

後拾　たちいあれ澤へになるゝ春駒いおのか影をや友と見るらむ　兼長
詞　まこも草つのくみわたる澤邊にいつなかぬ駒もはなれさりけり　俊惠
同　とりつなく人もなき野の春駒い霞にのみやたなひかるらむ　盛經
同　もえ出る草葉のみかは小がさ原駒のけしきも春めきにけり　覺雅
月　とりつなく人にいあるゝ春駒のなつきにけりおあしの若葉に　覺忠
代　春草のはさかのを野のいなれ駒秋そ都へひかんとすらむ　師俊
ねよけなる野澤の草になれておと駒のこゝろのあれまさるらむ　春海
かけろひのもゆるあら野のあら駒もうら若草になるゝころ哉　たみ子
のる駒のうらやましとやいはゆらむとりもつおかぬ春の野かひを　蘆庵

野をひろみ空にとかける春駒いあそふ糸にそつなかれにける　景樹
のとかなる春の野原を見わたせいあるゝ駒にものるこゝろかな　同
引かへてのとけかりけりゆくかけも霞のひまの野への春駒　春庭

○

## 雉　きゝす　きじ

子を思ひ、妻を戀ふることなどを、よむなり。

椿　さく　なるゝ野原の　立かねて　すうのゝきゝす
かり人の　きゝすおくなり　みかりせし　やけのゝきゝす
たつきしの　かすみもふかき　春ふかく　山ちのきゝす
焼すてし　霞のをちに　ほろゝうつ　朝日さす野に
かすみつゝ　春の山ちに　ほろ〳〵と　子を思ふきゝを
春の日に　向ひの岡に　たちさらで　ありとも見えず
朝かすみ　かくれもやらで　かたをかの　八尾のきゝす
すだつ　玄のひかねてや　すゝろたつ　聲しきる
羽うつ　畑の下に鳴く　羽たゝく　朝あ〳〵鳴く
とよむ　しばなく聲　音になく　雪まよあさる
つまとひ　ねぐらの雪　朝月夜　裾野をさらを
朝踏む道　むら薄　かきね道　尾花かはら
おのが妻　子故にまどふ　つまこひ　聲かすかなり
芝草かくれ　おのかありか

## 名所

さか野　山城　大原山　同　小鹽山　同　春日野　大和　宇陀野　同
粟津　近江　猪名野　摂津

○

讀詞　み狩野よまたふる雪いきえぬともきゝすの聲い春めきにけり　能因
代　さいたつまたたうら若きみよしの野のかすみかくれにきゝす鳴也　忠度
同　さし鷹の羽がひの山を朝ゆけい飛火の原にきゝす鳴あり　隆信
類　やきのこもかた山はたの村すゝき頼むかけとやきゝす鳴らむ　雅有
旅人にやどかすか野の草まくらとも朝たつきしの聲かな　長流
若草のつまもこもれる春の野に玄のひかねてやきゝす鳴らむ　たみ子

あけぬとてなくやきゝすの聲のうちにはの〳〵しちむ春の山はた　春海
夕つく日やゝかけりゆく片岡の小松かくれにきゝすおくあり　景樹
都人心ゆく野の野つかさにいこひてをれゝきゝすなくあり　有功

○

## 雲雀（ひばり）

子を思ふこゝろの、深きよし、又ゝ、のどけき空にたちあかりて、鳴くさまあと、むねとよむべし。

空くれて　霞もふかき　ひとり鳴く　若葉の芝生
のどかなる　かすむ末野に　春の野の　聲のみあがる
床しむる　霞にまかふ　ひとり立つ　つはさやすめす
みちくるは　又あかるなり　今ゝとて　聲そおちくる
たつひはり　夕くれの聲　聲々に　おちくるは
くるゝ日の　空にさへつる　聲のみゝして
春風に　霞まぬ聲　あちはして　淺茅におつる
空たかく　床のすみれに　あくかるゝ　野澤の水に
雲に入る　子をおもふとて　夕ひはり　芝生の床
雲わけて　草にゝなかぬ　籠のひはり

## ●名所

飛火野（大和）　春日野（同）　片岡（山城）　比叡山（同）　美豆野（同）
岡田の原（近江）

○

万玉　うら〳〵にてれる春日にひはりあがりこゝろかなしもひとり思へゝ　家持
新拾　末遠きわか葉の芝生打なびき雲雀なく野の春の夕暮　定家
千首　野へ見れゝあかるひはりも今ゝとて淺ちにおつる夕くれの聲　家隆
春の野の霞をわけてなく聲のいや遠さかる夕ひはりかな　師兼
霞たつもる野のひはりあにしかもおもひあかりて音をはなくらむ　具淵
はるされゝすみれさく野の朝かすみ空にひはりの聲はかりして　枝直
根せりつむ野澤の水にかけ見えてひはりおちくる春の夕暮　千蔭
うちむれてすみれつむなるをとめ子か袖におちくる夕ひゝり哉　同
空とはくあかりもゆくか夕ひゝり野澤の水に影のかすめる　春海

おほそらはそこはかとなくかすむ野に聲のみおつる夕ひいりかな　春海
野へちかき垣ねに床やゑめつらむかすむ軒はにひいりかつなり　蘆庵
かすみ立けて今かおつらし夕ひはりはるかにきゝし聲のちかつく　同
草の名のはゝこましりよすみれさく野をなつかしみひとりおつらむ　春滿
枝たかみをらてわからし山の端の花より上にひいり鳴なり　依平
早わらひのもゆる春日の夕ひいりあかるも落るかけかとそ見る　黃中
かの見ゆる岡への空は朝雨のかすみにおりてひいり鳴なり　久胤

## ○花（はな）

花といふ題にてい、櫻の事をよむべし。

**尋花**（はなをたづぬ）

雨をもいとゝす、尋行くこと、又山ふかく分け入ることなど、さま〳〵あるべし。

**待花**（はなをまつ）

年立つ朝より、待わびし心より、惣て春になりて、待居ることを、廣くよむべし。

**初花**（はつはな）

初て咲き出たる、花のめつらしき、さまをよむべし。

**盛花**（はなさかり）

花さかりにおりて、大方ににぎやかおる心なとさま〳〵に、よみやういあるべし。

春の日の　花まつころの　花ゆゑに　花にまかせて
花さかり　花まつころの　おしなべて　四方の山へに
花の色に　尾上の花に　いたつらに　よもの梢を
暮やすき　花のさかりに　さかぬまい　霞の色を
けふもまた　松もまいらに　山たかみ　花のこゝろも
春こゝに　花をし見れい　かくはかり　待にし花の
見るまゝに　花のうき世と　にはひこはるゝ　にはひこはるゝ
山かせの　同し山ちに　分ゆけは　こほれてにほふ
さきのこす　いつくの山も　そこともゝ　そこともゝ
よも山の　心にのこし　咲さかす　花の香ふかき
あくかれて　花にこゝろを　峯つゝき　風こそかをれ
咲にけり　あたなる花の　見えつるい　花見てあかぬ

我宿の　花こそにほへ　おかめつる　くる春ことに
峯遠く　高根の花の　花みれゝ　またるゝ花の
花なれと　にほふ嵐に　花の香に　見る春ことに
植ふきし　雲もましらぬ　見る人の　花にいくたひ
いそぐらん　花まつほとゝ　月よりも　うき世の春に
山かけに　花の香おくる　春　風の　花と雲との
去るへにて　かへる山路ゝ　咲にほふ　雲をかさぬる
さくら花　若木のさくら　さくら色　花の山ふみ
さくら木　御階(ミハシ)しのさくら　さくら咲く　花のむらたち
花さくら　花もてはやす　いとさくら　花の大ぬさ
緋さくら　花の木かくれ　いささくら　ことはの花
花いかた　花にうきたつ　花こゝろ　去つえの花
花の立枝　花の千もと　花のかけ　花の村雲
花のよそめ　花のたより　花の下かせ　花のはやし
花の曙　花の去らゆふ　心も花も　花のふゝき





月と花と　また花おらぬ　一枝は　咲のをゝり
咲の盛り　盛りまたしき　家つとに　匂ひこよなき
空さへ匂ふ　枝にこもれる　影うつす　枝もとをゝに
雨をいとふ　み國からとて　山のはこと　山ちくらして
山のかひ　みゝ谷かくれ　ふられぬ　夕はえまさる
春　の　光　松の葉こしに　このもとよ　夜もわすられぬ
あかぬ心　見れともあかす　心つから　家路わするゝ
あはれとも　おくろゆかしき　いひ去ちぬ　ねくらの鳥
尋ね入る　尋ねたれゝ　尋ねつゝ　くれぬとも
尋ねきて　つま木の道　花見るとも　けふもくらしつ
かもかけに　こその去をり　けふいく里　花のすかた
去らぬ山路　あとの白雲　花と見て　かすみへたゝる
さそはれて　つはめる花　花よいかに　ふくめる花
花さかは　花待はとの　花をいそく　枝にこもれり
まださかぬ　さかぬ日かす　おもへとも　人たのめなる

いつしかも　つく〳〵と眺る　まちとはに　けふかあすか
初さくら　初花さくら　一木さく　朝日さしかたえ
見そむる　けさの一枝　月の匂ひ　あらそひかねて
花の秋　心ありて咲く　八重さく　此春雨に
匂ふさかり　御代の春かな　うら〳〵と　けふをさかりと
今をさかり　世い花になる　咲みちて　咲そふ花
さきをり　咲ものこらず　稍あまた　風もさわかぬ
むら山　光あまねき　おしなへて　かはめくはどに
色ふかく　散へくもあらず　心つから　花より去らむ
櫻に曇る　家路わする丶　雪かとまてに　今盛りあり
春のつれ〳〵　見まくほしさ　咲きのさかり　さかる日影
まれし花　このひと花　枝に少き　風もさいらぬ

## ●名所

上野　武蔵　隅田川　同　飛鳥山　同　小金井　同　日暮の里　同
嵐山　山城　朝日山　同　大井川　同　鞍馬山　同　天の香具山　大和
吉野山　同　泊瀬　同　須磨浦　播磨　志賀山　近江　比叡山　同
比良山　同　櫻川　常陸

○

春雨にあらそひかねてわか宿の櫻の花い咲そめにけり　讀人不知
万　我ゆきは七日はすきじ龍田彦ゆめこの花を風にちらすな　讀人不知
同　まてといふにちらでしとまるものならはなにを櫻におもひまさまし　讀人不知
古　ことしより春しりそむる櫻花ちるといふことはなからはざらなむ　貫之
同　山高み見つ丶わかこし櫻花風はこ丶ろにまかすへらなり　同
同　花のいろはかすみにこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山風　宗貞
同　人い丶いさこ丶ろも知らすふるさとは花そむかしの香にはひける　貫之
同　世の中にたえてさくらのなかりせは春のこ丶ろはのとけからまし　業平
同　年ふれはよはひは老ぬ去かはあれと花をし見れはものおもひもなし　前太政太臣
同　ふるさと丶なりにしあらの都よも色はかはらす花はさきけり　平城帝
同　いははしる瀧なくもかな櫻花手をりてもこむ見ぬ人のため　讀人不知
同　さくら花さきにけらしも足引の山のかひより見ゆる白雲　貫之

後　櫻はお今日よくみてむくれ竹の一よのほとにちりもこそすれ　是則
同　朝ぼらけ下ゆく水のあさけれと深くそ花のいろは見えける　貫之
拾　ちりぬへき花見る時はすかの根の長き春日もみしかゝりけり　清正
同　もろともにをりし春のみこひしくてひとり見まうき花さかり哉　讀人不知
同　さくらちる木の下陰はさむからて空にぞられぬ雪そふりける　貫之
同　よしの山きえせぬ雪と見えつるはみねつゝき咲さくらなりけり　讀人不知
後拾　吉の山やへたつ峰のしら雲にかさねて見ゆる花さくらかな　清家
同　高砂の尾上のさくらさきにけり外山のかすみたゝすもあらおむ　匡房
同　ちりはてゝ後やかへらむ故郷もわそられぬへき山さくらかな　道濟
後撰　鶯のおきつる聲にさそはれて花のもとにそわれいきにける　讀人不知
金　春雨にぬれてたつねむ櫻花雲のかへしのあらしもそふく　堀川右大臣
同　九重にひさしくにはへやへさくらのとけき春の風としらすや　實行
同　梢にはふくとも見えて櫻花かをるそ風の去るしおりける　俊頼
同　さくら花さきぬる時はさくら花たちものはらぬみねの白雲　顯季
同　さくらさく山田をつくる賤の男はかへす〳〵や花を見るらむ　經成
同　もろともにあはれとおもへ山櫻花より外にしる人もおし　行尊
詞　九重にたつしら雲と見えつるは大内山のさくらなりけり　出雲
同　春ことよこゝろを空になすものは雲非に見ゆるさくらなりけり　戒秀
同　み山木はその梢とも見えさりし櫻は花にあらはれにけり　頼政
同　白川の春の梢をなかむれは松こそ花のたえまなりけれ　俊頼
千　みよし野の花のさかりを今日見ればこしの白根に春風そふく　俊成
同　小泊瀬の花のさかりを見わたせは霞にまかふ峯のしら雲　重家
同　よしの山花のさかりになりぬれはゆる時なきみねのしら雲　爲業
同　さくらさくひらの山風ふくまゝに花になりゆく志賀の浦浪　良經
同　宿も宿花も昔によはへとも色はさびしかりけり　尋範
新古　よしの山こそのゑをりの道かへてまた見ぬかたの花をたつねむ　西行
同　八重よはふのきはの櫻うつろひぬ風よりさきにとふ人もかな　式子内親王
勅　咲かぬまゝ花とも見えし山櫻かなし高根にかゝるしら雲　周子
同　いとゝしく花も雪とそふる里の庭の苔路はあとたえにけり　兼宗
月　住なるゝわか宿なれと今朝見れはおぼめくやとに花咲にけり　公衡

同　白雲にあらぬ心も花ゆゑにまし野の山にかゝりぬるかな　定佐
同　をしみかね花のあたりに旅ねしつ夜半のあらしよ心してふけ　成仲
同　春の夜の月にいとはぬ白雲はよし野の山のさくらなりけり　季廣
同　花ちらす風のつらさにおとらぬゝ梢をこむるかすみ也けり　覺延
同　中〳〵にをしむ人なき深山への花をゝ風もさそはさりけり　元性
同　さゝ涙や志賀の都はあれにしを昔なからの山さくらかな　忠度
同　花ざかり青根か峯にたひねして幾夜あかしつ苔の筵に　右大臣
續詞　あはれにも春をわすれすにほふかなあたなる花の心とおもふに　賢智
同　年ふれとかはらぬ物は春毎に花にそめてしこゝろなりけり　新院
同　梓弓はるの心にいるものは高まと山のさくらなりけり　右大臣
同　水よりつる影のなかるゝもののならゝ末くむ人も花ゝ見てまし　賢仲
同　あさち原あれのみまさるふるさとにはひかはらぬ花櫻かな　顯方
代　少女子か袖なる山をきて見れゝ花のたもとはほころひにけり　清輔
同　花ゆゑにすきにし春をかそふれゝあはれ八十になりにけるかな　時房
同　山のかひたなひきわたる白雲は遠きさくらの見ゆるなりけり　貫之



同　よしの山みねたちかくす雲かとて花ゆゑ花をうらみつるかな　兼宗
同　うら〳〵とのとけき春のこゝろよりにほひ出てたる山さくらとも　眞淵
同　山さくらちれゝさきつくかけとめて大かた春は花にくらせり
同　よの中によし野の山の花ゝかりきゝしにまさる物ゝありけり
同　さくら花花見かてらに弓いれは鞆のひゝきよ花そちりける
同　たつねいる花のそちめにはかられてわけしやいくへみねのしら雲　宣長
同　世にあれは今年の春の花も見つうれしきものゝいのちなりけり
同　みわたせは花よりほかの色もなしさくらにうつむみよし野の山
同　松杉の枝をのこしてふる雪は外山にさける櫻なりけり　枝直
同　つら〳〵と花にこゝろをちらさぬゝ風も梢をよきてふくらむ
同　あかつきのみねにわかれぬ白雲は夜のまにさける櫻こけり
同　住あせは庭のこけちにちる花のかとをきゝしるをりもありけり
同　ふるさとを花のころのみとふ人ゝあれにけりともおもゝさるらむ
同　世の人の心を春にあすものは野山にはふさくらなりけり　千蔭
同　世の中に花みてくらす春ゝかりおもふことなき時はありけり

あしからやみねの岩ねにやそらひて八重山とはさ花を見る哉　千蔭

さくらさく大井のさとに一夜ねてあすはさくらの花もわけ見む　春海

柴の戸の花おわすれそ都人われにはうときこゝろなりとも　同

さま〳〵の花はあれとも春のひかりそさくらなりける　蒿蹊

春雨のはれゆく野へに出てゝ見れは若木のさくらさきそめにけり　土満

一村の雲こそかゝれ山のもとの遠き梢の花やさくらむ　蘆庵

大井川かゝらぬ水に影見えてことしもさける山さくらかな　景樹

ちることをなにかいひけむ山櫻さくもこゝろにまかせさりけり　同

あれ〳〵われに千とせの命あらはゆつらまほしき山櫻かな　有功

よしの山かすみのおくはしらねとも見ゆるかきりゝ櫻なりけり　知紀

君か代ゝ大宮人にあらぬ身も櫻かさして春をくらさむ　定信

春の日ののとけき花の心とてさくをいそかぬ山さくらかな　春庭



## 落花　ちるはな

花の散るさまより、春の過行くなとに、かけてよむなり。

花さそふ　花のふゝき　花のゆくへ　ちる花ことに
花ちりて　ちりかふ花　花ちりて　さくらちる夜
ちるとみて　ちるまをだにも　ちるか上に　ちるゝかきりの
ちるまゝに　ちるを習ひの　ちりぬへき　秋寒からぬ雪
ちるかた　苔の上にちる　かつちる　ことしのみちる
つひにちる　苔をうつみて　うつろふ　乱れておつる
色きえて　香をたにのこせ　風はやみ　木の本ことに
さそはるゝ　梢むあしく　ふる雪に　蝶にまかひて
ちるまゝに　心をくたく　心空なる　香さへとまらぬ
むかあきは　山風つらく　あたにちる　月もくもりて
はかなく　風にそくもる　あまきる　惜ぬ人もあらじ
大かたは　物をこそ思へ　あやなく　いかゝゝすへき
末つひに　去ひて戀しき　ことならば　波のうたかた
中ろら　あり明つく夜　心つから　春のかたみと
殘りあく　とゝめまほしき　あかなくに　あらしのつて

吹ためて　ちるゝ雪かと　ふめばをし　ちゝにくたくる心

○

古　久かたの光のどけき春の日に去つ心なく花のちるらむ　友則
同　たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり　因香
同　空蟬のよにも似たるか櫻花さくと見しまにかつちりにけり　讀人不知
同　ちる花の鳴にしとまるものあらゝわれ鶯におとらましやは　浴子
同　うくひすの鳴く野へことにきて見れはうつろふ花に風そふきける　讀人不知
同　ふく風と谷の水としなかりせゝみ山かくれの花を見ましや　貫之
同　やとりして春の山へにねたる夜は夢のうちにも花そちりける　同
拾　との守のとものみやつこ心あらはこの春ばかり朝きよめすな　公忠
後拾　さくら花道みえぬまてちりにけりいかゝはすへき志賀の山越　成元
金　花さそふあらしや峯をわたるらむ櫻波よる谷川の水　雅兼
同　今朝見れは夜半のあらしにちりはてゝ庭こそ花のさかりなりけれ　實能
千　ふく風をなこその關と思へとも道もせにちる山さくらかな　義家
同　花のみおちりての後そ山里のはらはぬ庭は見るへかりける　俊實

同　花のちる木の下かけはおのつからそめぬさくらの衣をそきる　仲實
新古　木のもとの苔の緑もみえぬまて八重ちり去ける山さくらかな　師頼
同　花さそふひらの山風ふきにけりこきゆく舟のあとみゆるまて　宮内卿
同　山寺の春の夕くれきて見れはいりあひの鐘に花そちりける　能因
敕　山さくら春のかたみにたつぬれは見る人なしに花そちりける　公實
同　風ふけゝ花のしら波岩こえてわたりわつらふ山川の水　西行
月　浦ちかく梢をはらふ春風に花のとまふくあけのそほ舟　長眞
同　うき世にはとゝめかねしと春風のちらすは花ををしむ也けり　圓法
續詞　よし野川岩せの涙による花や青根か峰にきゆる去ら雲　頼政
代　吉野山あたになかむる花よりもはかなく散るは涙なりけり　慈鎮
同　うき事もあらしと思ひしみよし野のおくにも花のちるを見るかな　覺延
同　櫻花高ねに風やわたるらむ雲たちさわくをはつせの山　後法性寺
同　ふきのはる木曾の御坂の谷風に梢も去らぬ花を見るかな　長明
同　いたつらに花やちるらむ高まとの尾上の宮の春の夕暮　行能
同　いにしへの春の形見になかめつる花をいつくの風さそふらむ　讀人不知

同

あとたえてけはしき谷の苔の上に花ふきおろす春の山風　安藝

花ちらす風のかくれかたつぬれはよし野のおくのま木のしけ山　長流

雨ましり風うちふきてふるさとにちる花さむき春の夕暮　契冲

すかのねの長き春日に袖たれて見んとおもひし花ちりにけり　眞淵

みよし野をわか見にくれは落たきつ瀧のみやこに花ちりみたる　同

かつらきや朝つま風の朝たちてとよらの寺にさくら花ちる　春卿

をしめとも人には花のつれなくて風のこゝろになとまかすらむ　春海

いかにせんよし野のおくもちる花のうきよのかれぬ春の山風　宣長

花さそふあけかたさむきまきの戸に雪ふきいるゝ庭の春風　同

さくら花こゝちちる山こえくれはわかのる駒はつき毛となりぬ　高豊

夕かせのすたれうこかすひまとめてをと女か袖にちるさくらかな　千蔭

春風のかすみふきとくをり〳〵はちりかふ花に月そくもれる　同

をしみつる人ゝかへりてさくら花ひとりやちらむよるの山陰　蘆庵

とふ鳥の羽風もいとふ花の枝にあまりつれなくふくあらしかな　定信

くれやらてかすみにとまるかけ見れは夕日も花ををしむなりけり　景樹



梢ふく風も夕ゝのとかにてかそふるはかりちるさくらかな　同

## 春興

○ はるのあそび

春の遊ひなり。花鳥に心をやり、野山に遊ふなと、さま〳〵におもしろく、のとかなるこゝろに、よむべし。

おもふとち　袖をつらねて　心うらゝに　盃にうかぶ

鳥も なく　春日たのしき　心なぐさ　柳も打ゑむ

心ひろらに　花よりはかに　心をのへに　花をかざして

つゝなぬく　草木もめぐむ　菫つむ　たのしくあるか

えならす　花見てくらす　花の本　柳つまくる

いつゝあれど　心も空に　旅ねして　たるゝ藤波

あかぬ心　梨の花さく　梅のはつえ　かさしの梅

のとけしな　菜の花匂ふ　霞をくむ　長き春日を

ひはり鳴野　千とせの春　きゝすなく　かすむ朝日

春にあふ　遠山眉もひらく　くるゝもよしや

万　春の野にすみれつみにとこしわれそ野をなつかしみ一夜ねにける　赤人
後　うくひすのなきつる聲にさそわれて花のもとにそわれいきにける　讀人不知
拾　世の中にうれしきものはおもふもとち花見てくらす心なりけり　兼盛
新古　わかこゝろ春の山へにあくかれてなか〳〵し日を今日もくらしつ　貫之
すかのねの長き春日になりぬれは心すさひそいとなかりける　眞淵
大井川月と花とのおほろ夜にひとりかすまぬ波の音かな　蘆庵
この間より月のさしたる盃に花のかけをもうけてけるかな　景樹
大かたの人はかへりてあらし山月と花とにありにけるかな　廣海
岩つゝし山吹にはふまし水にはるせきとむる柴のいほかな　千蔭
花見んとわけいる山のみちもせにふりすてかたきはつわらひ哉　同

## 野遊　のあそひ

堇摘み、つはな拔きなどして、春の長日、野へに遊ふ、さまをいふ。

みやこ人　あかし〳〵日を　花のもとに　かへさ忘るゝ

大宮人も　袖をつらねて　心も野へに　春菜つみつゝ
おもふとち　若草もゆる　つみはやす　めもはる〳〵と
打むれて　心やらんと　あくかるゝ　たゝまくをしき
心ひく　草のむしろ　ゆきくれて　ひはりの床
淺茅生　花の宿ゝる　心もはるゝ　いとものとけし
あくかれて　花のまとゐ　行きくるゝ　霞をわけて
家つと　家路わすれて　暮るゝわすれて　明日もきて見ん
のとかある片野　すみれさく野に　野ある草木

万　春の野に心やらんとれもふとち來たりし今日はくれすもわらぬか　讀人不知
古　いつまてか野へにこゝろのあくかれむ花しちらすは千代もへぬへし　素性
新古　おもふとちそこともしらすゆきくれぬ花の宿かせ野への鶯　家隆
玄ろ妙の袖ふりはへてかけろふのもゆる玄は生にすみれつむあり　千蔭
わけのこすする野のかすみたちかへりあすもきて見ん春の夕暮　宣長
道すから草の若葉にあつさひてさもこゝろゆく春の野へかな　同

かすみたつ春の日の岡こえゆきて岩田の小野に今日もあそはむ　景樹

さと中のかすみまてをそすさひける野へのあろひにくらしあまりて　同

こゝもをしかしこもゆかし行とまりおもひさためぬ春の野へかな　成章

## ○四月

### 桃　もゝ　もゝのはな

むかしゝ、三月三日の曲水宴、及ひ雛祭の事などに、思ひかけてよみし也。

もゝのさく　桃のさくころ　もゝの花咲く　もゝ匂ふ

花かつら　桃の花ふさ　みちとせ　桃のひとむら

さける桃　桃のさかつき　八重もゝ　もゝのえまひ

桃の雫　千年を契る　下てる桃　桃の花園

からもゝ　紅よはふ　もゝちたひ　桃のよゝと

ひめ桃　九重の臺の桃　もゝよろこひ　桃園のむかし

### ●名所

越が谷　武蔵　桃園　山城　くらふ山　同　天の川　河内

後拾代　三千代へてなりける物をなとてかはもゝとしもはたなつけそめけむ　花山院

君が代のかさしにをらむ三千年のはしめに咲る桃のはつ花　堀川

今も猶ゆきて見てしか桃の花さくやみ谷の水のみなかみ　千蔭

かくなから色もかはらて桃の花百代も千代も見るよしもかな　宣長

にも鳥のかきねにあさる聲きかいもゝさく空も費すきにけり　敏行

ものいはぬ花とし云れと木のもとを心ありけに人そとひける　春海

### ○菫菜　すみれ　つぼすみ

春の野に、紫色に、咲つゝくものなり。すみれといふより、住家のことなどに、かけてよむもあり。

すみれ草　すみれさく野　花すみれ　すみれ花さく

すみれつむ　垣ねのすみれ　こゝにすみれ　心すみれの花

ひとりすみれ　妹とすみれ　こむらさき　新むらさき

薄むらさき　色もむつまし　いろいえて　匂ひえならぬ

妹がゆかり　またはつかなる　草のゆかり　庭もせよさく
ゆるしの色　しめさすゝかり　つみはやす　つみにくる人
きやとる人　眞袖につゝむ　露なから　露しけくとも
よもきふ　つみてもゆかむ　裳裾ひく　一夜ねしなごり
こよひねて　つもあましり　袖たれて　しけみがもと
月もすみれ　ゆくてにつむ　春の野　ぬしなきやと
山さとの　荒田のくろ　朝またき　野をなつかしみ
霞む野　妹か垣ね　こむらさき　行春のかたみ
小松が本　ふもとの野へ　すみれの床　雲雀あく野

## ●名所

紫野 山城　伏見野 同　日の岡 同　布留野 大和　引馬野 遠江
淺野 淡路　遠里小野 摂津

千　今霄ねてつみてかへらむすみれさく小野の芝生に露玄けくとも　國信
同　道遠み入野の原のつほすみれ春のうたみにつみてかへらむ　顯國
新古　いそのかみふりにし人を尋れゝあれたる宿に菫つみけり　能因



同　野へに生るうす紫のつほもみれ誰なつかしき色にそめけむ　季成女
同　蓬生の庭のしけきゝさびしきよ心すみれの花のみそさく　通親
代　春雨のふる野の道のつほそみれつみてもゆかむ袖ゝぬるとも　定家
同　朝またき岡の〻野へのつほすみれつむへきはとになりにけるかな　經衡
同　つむ人も袖ぬらしけり故さとの庭のすみれにかけるしら露　久我内大臣
ふるさとの野へ見にくれゝ妹とわかむかしすみれの花さきにけり　眞淵
いささらゝ春の野守にやとからむともにすみれの花になれつゝ　春海
みゆきせし大原のへのすみれ草昔の袖のいろそのこれる　千蔭
朝戸出の庭の芝生にきのふまてしらぬすみれの花さきにけり　宣長
あれはてゝ野となる庭のすみれ草こゝも昔のかきねとやさく　蘆庵
つめとてやきゝもしはなく瀧の上の淺野のすみれ今さかりゝ　景樹

## ○苗代（なはしろ）　春田（はるのた）

荒小田をすきかへすさまより、總て暮春のことに、いひかくへし。

かぞ　た　苗代　水　あら小田　野さはの水

かきつ田　蛙なく田　あせつたひ　あせの細道
うちかへす　水せき入れて　御代のめぐみ　青みわたれる
君かため　御代のめぐみ　菅笠　かけひの水を
賤かうつ　霞む山田　うちかへす　引すてし忘れ水
水口祭る　岩ゐる水　水のこゝろ　あせこす水に
種かるす　賤が苗代　みしめひく　いはしろ小田
水こゆる　水かさまさる　ふみわくる　川そひ小田
小雨ふる　いさゝ小川　入江せく　かへす〳〵も
濁り行く　細谷川　ふる雨に　ゆたけき御代
すきかへす　五十串たつる

## ●名所

鳥羽田　山城　伏見の小田　同　竹田　同　布留の早田　大和
住吉の岸田　摂津

○

金　鳴のゐる野澤の小田をうちかへし種まきてけり苗めはへて見ゆ　國基

月雪　苗代にせきやとむらむ垣根なるいさゝ小川の音よわるこ　忠度
それとなき堤のやぎうちけふり苗代水に入日さすなり　實隆
たのみあれや今より水もゆたかにて年さかゆへき小田のなはしろ　宣長
苗代の水口まつりしめはへて秋のたのみやかけていのらむ　春海
ゆく河の水をくもてにせきわけて苗代いそく時はきにけり　千蔭
小山田のなはしろ水いそこすみてひく苗めはのかけも見えつゝ　景樹
あせこゆるなはしろ水は君か代のめぐみの露のあまるなりけり　正根
水にすむ蛙も花に聲すゐり櫻ゐかるゝ小田の苗代　季鷹

○

## 蛙（かはづ）

蛙い、田の蛙と、川の蛙と二種あり、いつれをよむもよろし。

小山田や　霞の末の　夕くれに　をたの蛙の
鳴かはつ　うきぬの蛙　あら小田に　聲もをしまず
時きぬと　折をりかはに　聲たてゝ　野澤の水に
蛙なく　夕くれのこゑ　夕かはづ　春の夕くれ

月にあく　板井のかはづ　花になく　すたくかはづ
なける蛙　聲もさやけし　聲ひゝく　聲老にけり
ころひ聲　夜聲かしまし　もろ聲に　河をさやけみ
櫻ちる　かすむ川戸　谷川に　瀬をはやみ
上つせに　井手のえからみ　池のこゝろ　つまよふこゑ
水あさみ　聲うちそへて　みかくれに　聲そなかるゝ
さゝ波に　田つらの澤　つまこふと　春ををしみて
池水に　井手の浮草　う・き藻　雨にあるこゑ
夕さらず　小雨ふる江　夕月夜　雨をもよほす
春ふかみ　物おもひをれゝ　雨そゝく　雨まちかはに
小なき咲く　この夕かけに　このもかのも　池のみきはに
夕かたまけて　花ちりかゝる　あせこす水に　えつか門田に

## ●名所

井出の玉川 山城　佐保川 大和　飛鳥川 同　初瀬川 同　玉江 同
吉野川 同　五十鈴川 伊勢

後拾　○みかくれてすたく蛙の諸聲にさわきそわたる井手のうき草　良羅
六　山吹の花影見ゆる澤水に今そ蛙のこゑきこゆなる　讀人不知
同　音はかりたつる白河しらぬとも蛙か聲をとめてきにけり　讀人不知
千　山吹の花の妻とはきかねともうつろふあへになく蛙かな　清輔
新古　をりにあへはこれもさすかにあはれなり小田の蛙の夕くれの聲　忠良
月　ま菅おふるあら田に水をまかすれはうれしかはにも鳴蛙かな　圓法
代　わか宿の坂井の水やぬるむらむ底の蛙の聲すたく也　好忠
同　高瀬舟のぼる堀江の水をあさみ草かくれに蛙なく也　顯仲
霞しく春のすゑ野の澤水にゆふへさひしく蛙なくこゑ　宣長
雨そゝくをたの水口水ましてところえかはよなくかはつかな　春海
なれもまた春をやをしむちりまかふ山吹のせに蛙なく也　春海
春ふかき井手のわたりの夕まくれかすむみきはに蛙啼也　蘆庵
新治の田つらの水ゝ蛙さへまたすみなれぬ聲になくなり　光秋
ゆきゆけとあは川上にきこゆなりかわつ啼瀬やいつこなるらむ　茂岳

むかしわかおつみにそひて見し花のかけもこひしく蛙かな　諸平
月かすむ門田のかはつ聲たてゝねふりもよほす春の夜半かな　春門
雨そゝく草の下水くれそめて田つらの澤にかはつおくなり　氏綱

○

## 燕　つばめ　つばくらめ

鴈と相反して、秋去り、春來る、意をよむ也。

つばくらめ　妻とふつばめ　つはめくる　ちきりわすれす
つはめおく　軒ととおれす　おくつはめ　友よひかはす
つはくら　つかひはおれぬ　むれくる　あひはなれぬ
かへりくる　心かとらす　春ごとに　ふるすたつねて
雲ねより　あるしわすれぬ　柳のえだ　翅かろげに
いとゆふ　翅おらふる　軒に　ものわすれせぬ
ふるさと　來おれし宿

○

草

この春もふるすたつねて山かつの宿をわそれぬつはくらめかお　頓阿
山なしの花のちりくるこのもとを翅のろけにとふつはめかな　尊孫
かたらはん友にもあらぬつはくらめなれてきたるゝうれしかりけり　景樹
今朝見れはいつかきにけむわか門の苗代小田につはめとふ也　同
たをやめか袂のるけに立まひしすかたおはゆるつはくらめかな　雅嘉
かけてたにちきりもおかぬ山かつの軒になれくるつはくらめかな　春夫
風かよふ門の柳のいとまなく聲もみたれてとふつはめかな　好古
玉すたれうこかす風にさそれて軒ゝはなるゝつはくらめかお　光彫

## 躑躅　つゝじ

花つゝし　うす花つゝし　つゝしさく　初花つゝし
白つゝし　おくてのつゝし　ひめつゝし　きりしまつゝし
もちつゝし　さ月のつゝし　つゝし原　松の下つゝし
下つゝし　岩もとつゝし　岩つゝし　つはみのつゝし
ふくめる　花の夕はえ　花にはふ　花の八しは
さきましる　道もせに咲く　岡つゝし　袖にも似たる
夕日かけ　まくり手にして　夕日てる　つま木にもるゝ

霞の色　こそめの花　色こかる　紅くゝる水
丹つゝし　下もてるまて　からにしき　もゆるつゝし
春ふかみ　雨に玄をるゝ　谷かけの　妻木にさせる
夕つゝし　おもひの色よ

## ○名所

大久保 武蔵　日暮の里 同　常磐山 山城　双の岡 同　岩田の小野 同
初瀬川 大和　吉野川 同

○

後拾　わきも子か紅そめの色と見てあつさはれぬる岩つゝしかな　義孝
金　入日さす夕くれなゐの色はへて山下てらそ岩つゝしかな　三河
月　何事を玄ふの岡の岩つゝしいはておもひの色にいてぬらむ　頼圓
くれなゐのうす花さくらちりすきてつゝしそ春の千しほなりける　宣長
旅人の松の火かけと見るはかりもゆる山路の岩つゝしかな　千蔭
あらましきいはほいなとさきにけん妹か赤裳よにつゝしの花　春海
つゝしさく松かけはかりくれなゐに玄はし入日のかけそのこれる　春満
遠かたのこゝしさくゐの岩かとに夕日をのせてつゝしにはへり　章永

○

ふかみくさ

## 牡丹

ふかみくさ　露の玉ふさ　咲しより　にほひみちたる
くれなゐの　蝶もむつるゝ　ふゝむより　いひしらぬいろ
えならぬ　匂ひみちたる　露よ咲く　行春のかたみ
ほころふ　紅のこそめ　二十日さく　花の大君

○

詞草

ささしよりちりはつるまて見しやとに花のもとにてはつかへにけり　關白前太政
さく花の露もこゝろもふかみ草たゝはさりの色とやは見る　正徴
大君の名をしもおへる花見れはうへも世に似ぬ色香なりけり　春海
ふかみ草さける日ころをかろふれは春もはつかになりにけるかな　廣海
庭にはふむくちの露もてるばかり色ふかみ草花さきにけり　太訓
大かたの花をそくしてこのころの春ふかみ草さかりなりけり　紀貫

## 杜若　かきつばた

春雨に　花さく池の　行く春　岩かきつはた
色ふかく　にはふ澤への　春のへたて　色ゆるされて
おしおへて　むらさきにはふ　岩かき沼　袖のつまずり
咲かこふ　池のさゝなみ　沼水に　芦のはましり
かきつはた　色もむつまし　いろに出てゝ　狩人の衣にそる
影うつそ　春をこめて　淺さゝ　波のあやおる
ゑめさして　水のみとり　しらさき　汀にたてる
石間　ふかき色ある

## ●名所

淺澤小野　攝津　こやの池　同　廣澤　山城　伏見の澤　同
いかはの沼　上野　淺香の沼　陸奥

○

金　あつま路のかはやか沼のかきつはた春をこめても咲にけるかな　顯季
代　こやの池のあやめにましるかきつはた花ゆゑ人にしられぬるかな　後鳥羽院
同　こなきつむあかたの宿のかきつはた花の色ころへたてさりけれ　俊成

かきつはたかけ見るいけやむらさきのよはへる妹かかゝみかるらむ　千蔭
かきつはたむらさき深くさきしより池のこゝろもうつろひにけり　景樹
池にすむをしの羽色もわかぬまてさきつらなれるかきつはたかな　有功
めてあかぬあとなしことを行水に數かきつはた花咲にけり　嘉言
池水の波の花さへむらさきの色にさきたつかきつはたかな　春庭

○

## 款冬

やまぶき

山ふきの　花さきにけり　行く水に　八重にのみさく
春ふかみ　花の姿らつゆ　蛙なく　ゆきてやみまし
いはでさく　春のあこりを　咲そひて　底にそうつる
ちらぬまに　いはぬいろなる　水きよみ　名になかれたる
いく春に　井手のやまふき　かけみえて　咲山吹の
なのれ行く　はやせの波に　咲そめて　下ゆく水に
にはふより　暮行く春の　里とはみ　八重山吹の
ゆく春を　妹にも似たる　春かせに　かけ行く水に

口あしの　名におふ井手の　露もこぼれて
たつねきて　さけるをみれば　うるし世を　道のへの
咲にほふ　うつれる水に　にほひそひ行く
庭もせに　花そ露けき　花もこたへす　色はへて
うつろふ　花の夕つゆ　露さへにほふ　行く春を
八重山吹　花に掉さす　花のえがらみ　一重さく
春雨よ　香さへおつかし　こぼれてさける　妹に似る
人のかさし　えつえ波こす　枝さしそひて　枝かはす
川くま　かけおもはゆき　ぬれてさきたる　瀧川の
いひしらす　おく露ながら　筏さす川せ　波にをられぬ
來ても見よ　露のういすり　たつねつゝ　おく露きよし　川よと
ことゝへと　わくるまそで　春のなごり　底のかけさへ　をしの居る
影見ゆる　咲こぼれたる　花の露　垣ねふるさぬ　たつねつゝ
春ふかき　姿やさしき



## ●名所

井出の玉川　山城　大井川　同　山吹の瀬　同　清瀧川　同　三室の岸　同
六田の淀　大和　吉野川　同　神南備川　同　山吹の里　武藏　水無瀬川　攝津

○

万　蛙なく神南備川に影見えて今やさくらむ山ふきの花　厚見王
古　よしの川きしの山吹ふく風に底のかけさへうつろひにけり　貫之
同　今もかもさきにほふらむ橋の小しまか崎の山ふきの花　讀人不知
後　都人きてもをらなむ蛙なくあかたの井戸の山ふきの花　公平女
拾　春ふかみ井手の川波たちかへり見てこそゆかめ山ふきの花　順
同　澤水にかはつ鳴くゐり山ふきのうつろふかけやそこに見ゆらむ　讀人不知
同　わか宿の八重山吹い一重たにちり殘らなむ春のかたみに　同
新　駒とめておほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川　俊成
同　岩ねこす清瀧川のはやけれは波おりかくるきしの山吹　國信
勅　見ぬ人にいかゝかたらむ口なしのいはての里の山ふきの花　讀人不知
同　ふりぬともよし野の宮は川きよみきしの山吹影もすみけり　俊成
同　玉もかる井手のえからみ春かけてさくや川せの山吹の花　鎌倉右大臣

月代

山川の岩間の水ははやけれときしの山吹かけそ流れぬ　定安
君こずてちりかすきなんふるさとのみかきに咲ける山吹の花　爲家
山吹はしたゆく水も花なるをこゝろしてさせ春の川舟　眞淵
ふるさとは春のくれこそあはれなれ妹にゝるてふ山吹の花　同
昨日今日やへやまふきはさきにけり井手の川せに春やゆくらむ　美樹
くれゆくをれのかいろとや夕つゆにさきものこらぬ山ふきの花　蘆庵
そこすめる岩井の水をかたみにてたちよろひたる山ふきの花　千藤
露ふかき山路わけきてをのゝ柄のくちなしろめの花を見るかな　自寛
妹背山中ゆく河にかけ見えてにほひかはせるきしの山ふき　春海
山ふきの花そ一むらなかれける筏の棹や岸にふれけむ　景樹
ひさことる袖にみたれて山吹の花もくまるゝいさら井の水　依平
一重にも八重にもさけと山吹はたゝ口なしの外おかりけり　御杖
玉水を結ふ手清くなりにけりいさやをらまし山吹の花　有功
ひきのはるふねの綱手も心せよきしの山吹今さかりなり　信友
ふるさとのあれしまかきの山吹に春もとまらぬ夕風そふく　芳樹

## 藤　ふぢ　ふぢのはな

花の靡くさまの、波に似たるより、藤波のはなといへり。されい、波おとの緑をとりて、よむもよろし。

たちかへり　にほふふちなみ　池水に　よせていかへす
むらさきに　まつのみどりに　白藤の　をのへの松に
松かえに　かゝりてにほふ　いく春も　靡くふちなみ
春の日の　猶見てゆかん　梢より　きしのふち波
住吉の　糸よりかくる　花さかり　花のあたなみ
雨ふれい　いくしほそめし　春風の　我もとゆひの色
咲そめて　おひそふ藤　かけうつす　幾春かけて
袖ふれて　松にかゝれる　影見えて　春風にほふ
雲とのみ　春さへふかく　紫の雲　紫ふかく
陰なひく　うすく乱れて　うつもれて　夏にかゝりて
木高き松　はひまつはる　春日さく　谷のふちなみ

藤のうら葉　藤の下行く水　藤の花さく　よする藤波
藤の去つく　藤の去あひ　藤かつら　梢をこえて
藤さく門　藤咲きかゝる　さかゆる藤　この春雨に
音せぬ波　底もにほひて　岸の藤波　涙もかゝれる
夕日よにほふ　空よりかつる波　雨に色ます　千とせかけて
瀧ついはね　藤の下かけ　藤のかさし

## 名所

小くら山　山城　男山　同　鴨川　同　宇治川　同　清瀧川　同
亀井戸　武蔵　清見潟　駿河　住吉の岸　摂津

○

後拾　水そこの色さへふかき松かゑ枝ゑ千とせをかけてさける藤なみ　讀人不知
紫の花とそ見ゆる藤の花いかなる宿の去るしなるらむ　公任
同　紫の色しこけれゝ藤の花松のみとりもうつろひにけり　讀人不知
後拾　水底も紫ふかく見ゆるかな岸のいはねにかゝる藤涙　賀季
金　ぬるゝさへうれしかりけり春雨にいろます藤の雫と思へば　顕仲
同　色かへぬ松によろへて東路のときはのはしにかゝる藤涙　大夫典侍
同　むらさきの色のゆかりに藤の花かゝれる松もむつましきかな　顕輔
新古　まとゐしてみれともあかぬ藤涙のたゝまくをしき今日にもあるかな　天暦御製
代　ぬれつゝもをりてかさゝん石はしる瀧つ岩ねにかゝる藤涙　家隆
ふちなみの花のさかりいつつろはぬを春ゝはやくもくれにけるかな　春郷
かいにける松にかゝりていつまてかわかむらさきの藤なみの花　春海
日をかさねさきそふ藤のむらさきゝ春深くしもそむるなりけり　同
松かえにはひかゝりてそ紫のにほひそはれるふちなみの花　千蔭
春風のみきはの松をふくたひにさとうちかをる池のふちなみ　春満
むらさきにさく藤なみにまつはれてときはの松も色かはりゆく　同
いつしかと藤さく池の水かゝみうつりにけりな春の日数ゝ　蓋庵
年ふりて老木の松も藤涙のわかむらさきにかへる春かな　大平
はとゝきすまつにこゑせぬ夕暮をうら紫に藤咲きにけり　梁
藤なみの花さく見れゝうちなひく春も末はになりにけるかな　景樹
山まつの風の上にやかゝるらむうちなひくなりふち波の花　有功

藤の花かさそにつけて懸しきいはつもとゆひのむかしなりけり　知紀

○

暮春

花はちり　春のわかれか　はかなくのこる
花鳥の　のこるかひなき　のこり少なき
なれきつる　花なき庭に　のこるともなし
春いやゝ　春そくれ行く　春やゆくらん
木のもとに　春やゆくらん　春そくれぬる
春の日も　霞さへ　とゝまらぬ　いたつらに　よそにゆく　去たへとも　をしむとも

残春（くれのはる）

かそふれい　つねよりも　すへもおし　けふのみと　なこりわれや　里わかす　つれもなく　春よまて　かきりありて　又もこん　去たひえぬ　あともなし

惜春（のこりのはる）

たちのいそき　とまる瀬もなし　とまりなるらん　ゆく春を　むなしきかたに　たかためとなく　入相のかね　またこむ春　花の去からみ　霞もたえぬ　蛙もをしむ　なきてとゝめよ

いまさらに　のこらさりけり　花鳥もまれなる
いつしかと　暮れてこそゆけ　花より後の
そこととなく　見るほとそなき　花ものこらぬ
今ゝはや　とまらさりけり　鶯も鳴て恨みよ
花ゝ根に　鳥は古巣に　ゆく春
そはる日かす　花ちるやま　名残おく
春のさかひ　とゝめえぬ春　はかなくも
ふるさと　さひしきものゝ　つれなくも
いぬる春　よろの春とや　いかよせん
花のあと　かきりある春　くれはつる
けふばかり　けふをわりなく　たちわかれ
ゆく水の　春のかきり　をしめとも

春くれて　夕かすみ　ならひとて
ゆく春　名残おく　はかなくも
をしさまされり　つれなくも　花ゆゑをしむ
今日ゆく春　いかよせん　引きかへされぬ
鶯のまれなる聲　くれはつる　たちわかれ
かへらぬ波　をしめとも

○

古　花ちれる水のまに〳〵とめくれは山にも春ゝなくなりにけり　深養父
同　聲たえすなけや鶯一とせにふたゝひとたよくへき春かは　興風

古今　今日のみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花のかけかは　躬恒
後詞　をしめとも春のかきりの今日の日の夕くれにさへありにけるかな　讀人不知
千　老いてこそ春のをしさはまさりけれ今いたくひもあはしとおもへば　俊綱
新古　花は皆四方のあらしにさそはれてひとりや春の今日いゆくらむ　靜賢
同　石上ふるのやま田をうちかへしうらみかねたる春のくれかな　俊成女
同　柴の戸をさすや日かけのおこりなく春くれかゝるみ山への里　宮内卿
同　よし野山花のふるさとあとたえてむなしき枝に春風そふく　攝政太政
同　おかむへき殘りの春をかそふれは花とともにもちるおみたかな　俊惠
月　行春は風にしられぬ山かけの花のもとにや立ちとまるらむ　爲業
代　櫻花ちりにし時はうけれとも春のわかれの今日そかなしき　重之
六　つれ〳〵と花を見つゝそくらしける今日をし春のかきりと思へば　躬恒
花のみなちりての後は春さへに殘る日おくもおもはゆるかな　眞淵
はとともなく暮れなん春のおもはれていとゝつれなきありあけの月　枝直
あまたゝひ春のわかれにおれぬれとをしさい老もかはらさりけり　同
花ちりて人めたえにし山里にゆく春さへやとまらさるらむ　宣長

きぬ〳〵のうさにいくらもおとらぬい春つくる日のあかつきのかね　千蔭
すかのねのなかしとかもひしおほさりに今はたをしむ春のくれかな　同
日なかさもとはれぬまゝに知られけり花より後の春の山さと　春海
花鳥いかくれてまたやこの春ものこる日數をひとりをしまん　蓋庵
くれぬるか春いこてふの夢のまにおれ見し花をおもかけにして　同
春の日のいつはあれともいまはとてくれゆく今日のゆふくれのそら　土滿
山の端をおくれてかへる雁かねに春の名殘もなかめられけり　政直
春も今日くれはてけりとかもふにも常の夕の心ちこそせね　景樹
はるもはや一夜のつまとなりにけりむろの泊にこさやわかれん　同

## ○五月

### 首夏　初夏　早夏

孰れも夏のはしめなれとも、其差別あること、春に、立春初春早春等のあるかことし。

けふよりは　夏をむかへて　けさよりい　さらにこひしき
夏來てい　かすまぬ空　朝かせに　わかれしはるの

けふもおほ　花の面かけ　いつしかと　おもかけうすく
きのふまて　のこれる花も　ぶのつから　かたみも見えぬ
夏くれい　花ものこらて　あさみとり　春のおこりの
春の後　春いきのふに　今ははや　みどりそひゆく
去けりゆく　一夜のうちに　夏たてと　夏い來ぬらし
夏されい　衣ぬきかふ　夏　かけ　花のうつりか
夏にころ　花の袂のなこり　夏のさかひ　花のゆくへ
夏いきぬ　夜床のまくら　夏のそら　きのふの春
夏山　うすきたもと　夏のいろ　くれにし春
けふの夏　朝風すゝし　けふよりは　春の名殘
夏ころも　風をいまたし　夜の間に　春ヨすられぬ
ひとへ衣　わか葉さす　世い夏　はとゝきすまつ
空もとれ　わか葉の梢　夏なから　風そまたるゝ
夏なれや　みどりすゝしき　夏の朝　春おもはゆる
目にとまる　うの花垣に　風わたる　青葉ましり

○

六帖　花鳥もみなゆきかひてぬは玉の夜の間に今日の夏いきにけり　貫之
拾　夏にこそさきかゝりけれ藤の花松かとのみもおもひけるかな　重之
新　をしめともとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏ころもかな　素性
勅　かすみたる山路に去はしたちとまれ過きにし春の形見とも見む　相摸
續　ぬきかふる花の袂の移りかのかをるや春の名殘なるらむ　親隆
月　今日も猶風をはまたしおのつからおくれてにほふ花もこそあれ　行盛
はる霞あけしひと夜をへたてにてはれゆく空に夏はきにけり　宣長
梅さくらわか葉のかせもかをりきて夏もよしあるやとりなりけり　千蔭
をしみにし春もいつしかくれ竹のかけには夏のこのましきかな　同
花さかぬま木のとまやに春くれてかはらぬ色に夏はきにけり　枝直
ぬきかふる蟬の羽衣うすけれとあつさもよほす夏はきにけり　同
夏山やきのふの花の雲きえてわか葉にはふ朝日かけかな　春海
山さとのはらはぬ庭は夏なから苔路にましる花もありけり　同
風わたる淺澤水のさゝなみもこゝろにとまる夏はきにけり　景樹

立ちそめし春の去るしにひきかへてかすまぬ空に夏ぃきにけり　春庭
行く水にかけみえそむる夕月のすゝしきほどに夏たちにけり　碧亭
花にのみおれし衣のうちうへに風このましき夏はきにけり　芳樹

## 更衣　ころもかへ

夏のきて、單衣にきかふることをいふ。花におれたる衣の、かへうきことおぼえをよむなり。

きおらしゝ　たもとになつい　おれのみと　そめしたもとの
ぬきかへて　名殘ぃつきし　けさかふる　花のかもおき
きてみれい　いそさろかふる　けふといへい　けふぬきかへつ
かふれとも　あたなる色を　袖にも去はし　うす花染も
けふかへて　白たへの　けさよりい　たもともうすく
こゝろさへ　あかすして　けふよりかふる　袂になつい
のこさはや　たかころもてに　花のいろに　こゝろぃかへぬ
今さらに　けさころかふれ　たちかへて　ひとへにをしき
ころもてに　かとうの衣　人なみに　せみの羽ころも
けさいはや　花そめのそで　たちかふる　花の名殘
けふよりい　花すりの袖　花そめに　たちへたてぬる
あさ衣　なれしたもと　わきもこか　かたおもからね
去らかさね　色もすゝしき　かきりあれい　あやおく春の
めつらしき　心もうすき

○

拾　花ちるといとひしものを夏衣立つやおそきと風をまつかな　盛明親王
千　夏衣花のたもとにぬきかへて春のかたみもとまらさりけり　匡房
同　今日かふる蟬の羽衣きて見れは袂に夏はたつにそありける　基俊
新　ちりはてゝ花のかけおき木のもとにたつことやすきおつ衣かな　慈圓
六　花のいろにそめし衣のをしけれい衣かへうき今日にもあるかな　重之
月　をしむにも心なるへきたもとさへ花の名殘はとまらさりけり　定家
代　かきりあれは衣はかりはぬきかへてこゝろは花を去たふおりけり　西行
　山吹の花いろ衣ぬきかへて去ろきひとへもめつらしきかな　契冲

花そめのをしきわかれの露たにもかたみとゝめぬそての朝風　宣長
きならしゝ春の衣をぬきかへて又しも花にわかれぬるかな　春海
あにとおくにはひならねととり出てゝ去年なつかしき夏衣かな　景樹
ほとゝぎす庭の梢になきぬへき蟬の羽衣今日よりそきる　游清
花見つゝ野原玄の原わけなれし衣かへまくをしき今日かな　大平
なほのこる花にや袖をふれてまし薄きかとりの衣にはあれとも　たみ子

## 殘花（のこりのはな）

春の花の殘れるも、夏にありて、咲出つるも、共によむあり。

木かくれに　花かあらぬか　片山かげ　青葉かくれに
散りのこる　青葉にましる　夏かけて　春におくるゝ
猶のこる　春におくれて　咲きのこるらし　めつらしく　青葉にはふ
谷かけに　咲きのこるらし　たつねきて　花のありか
おそさくら　おくれてにはふ　夏きても　夏をよそにも
雪と見え　風よそ玄るき　思ひもかけす　深山にのこる

## 餘花（あまりのはな）　遲櫻（おそさくら）

玄つけさに　心ありけに　風玄らぬ　春のゆくへ
初花よりも　春の玄るし　み山には　春をとゝむる

○

古　あはれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらむ　俊貞
拾　足曳の山かくれなる櫻花ちりのこれりと風に玄らるな　小貳命婦
金　夏山の青葉ましりのさくら花初花よりもめつらしきかな　盛房
續　ちりぬとてたつねさりせは山さくら青葉かくれの花を見ましや　靜嵐
月　よしの山みねにたなひく白雲のたえぬやおそき櫻なるらむ　經盛
夏衣たつたの山にきて見れはうすくそのこる花の玄ら雲　契冲
おくれてい物すさましく見ゆる世に今もさくらのめつらしきかな　眞淵
春にこそおくれし色はふりぬらめ青葉の山のはつさくら花　長流
わけいりしかひはありけり夏山の青葉か中の花の一もと　枝直
世をいとふ谷のいほりのおそさくら時にきそはぬ心をやしる　春海
夏山の玄けみかおくの玄つけさに心のちらぬ花もありけり　千蔭
れそくさく花なりけらし山さむさをきそのおくに見ゆる白雲　蔦庵

はと、きすたつねていりしみ山路になほさかりなる花を見しかな　たみ子
氷室山去ける若葉の木の間より雪とも見えてのこる花かな　春夫
鶯の山ふかへりて鳴くかたに夏ともしらぬ花やさくらむ　英好

○

## 新樹

夏のはじめに、木々の葉の青々と茂りゆくをいふ。花のなごりを忍ひ、又いみじりの、やゝふかくなるけしきをも、よむなり。

かけきよき　軒はもくらき　若かへて　若葉さすかけ
陰くらき　ふかみとりに　玉かしは　木々のあさかせ
ふかみとり　若葉去けりて　かしはき　露のそむる
去けりろふ　庭の梢の　このて柏　古葉こほれて
かけもよし　露ちりて　みつえさす　葉守の神
雫ちる　にひかゝみ葉　かけひろき　楓の若葉
露むすふ　月たにもらぬ　朝風に　花のあとゝふ
日をさふる　みとりふかむる

○

後拾　わかやとの梢の夏にある時いいこまの山そみえすありける　能因
金　おしなへて梢青葉になりぬれは松のみとりもわかれさりけり　院御製
新　庭の面は月もらぬまてふりにけり梢に夏のかけしけりつゝ　白河院
代　いなみ野のむら〳〵見えし柏木の葉廣になれる夏ゝきにけり　重之
くたにさく園生の木々の若みとり夏このましき宿にもあるかな　眞淵
春の夜はかすみなからも見し月にひたすらさはる夏木立かな　宣長
わかさりし花のなこりとみよし野の山は青葉もあつかしきかな　同
なかめても心つくしはなつ木立ちちぬ青葉の庭の夕風　同
花鳥の春のあはれをゆつる葉の若葉の露に風そかをれる　枝直
いつしかと木々は青葉になりにけり庭のこけちに色をかはして　同
夏蔭や花にたをりし梢のみたま〳〵月のかけもらしけり　春海
雨そゝくかた山かけの夏木立いまひとしほのみとりをぞ見る　同
花にとひし軒端の梅の若葉さへ風いとはるゝ夕暮の露　千蔭
若葉さすかた山はやし露ちりぬ花にいとひし風の名殘に　同